

社 会 科 教 室

第 154 号

平成 23 年度

香川県小学校教育研究会社会科部会
香川県小学校社会科教育研究会

は じ め に

先日、香社研の大先輩（８２歳）の先生が資料を届けてくださいました。開けてみると、「学習改善における１０の着眼点」と題した論文で、お考えが丁寧な字でびっしりと書き綴られており、今も変わらぬよりよい授業を求める姿勢と、研究意欲の旺盛さに圧倒された次第です。そしてこの論文は「教師は、一人ひとりの子どもが学びの根をしっかりと張っていくようにと念じつつ授業力を鍛えよう。」と私たちへの熱いメッセージで結ばれていました。

さて、昨年度から香社研の本部役員や三観の社会科部長を仰せつかり、これまでとは違って、組織の内から社会科研究の取り組みを見ることができました。その中で、新鮮に思えたことや驚いたことなど、何点か述べてみたいと思います。

○ 短期・長期の研究計画をもつ香社研

まず驚いたのは、研究の見通しでした。平成２１～２８年度までの研究の方策を明らかにしているのです。８年間にⅢ期に分け、そのⅠ期として、２１年度：学ぶ意欲を高める学習の工夫、２２年度：学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める、そして本年度は学習評価を自己調整の過程からせまると設定しています。この計画に基づいて、意欲、思考、そして評価という条件を満たす魅力ある単元開発に各郡市が総力を挙げて取り組んでいるのも心強いことです。きっと、２４年度の県研究大会（浅野小学校）、さらには２８年度の全国研究大会において、香社研プランと名づけた理論と実践が公開されることでしょう。

○ 新しい風が吹きはじめた香社研

次に驚いたのは、香社研の総会や歓送迎会に出席すると、若い先生方がたくさん参加し、しっかり自分の意見を述べているということです。新たな人材が加わるということは、組織が活性化していく必要条件だと思います。今後は、この先生方が核となって、さらに若年層の先生方が社会科研究に加わってくれるのではないかと期待しています。

今、香社研では、新たな企画が次々と生まれています。その一つが、フィールドワークです。社会科教師にとって、フィールドワークは欠かすことができません。各郡市の若い先生方の代表が運営委員会を立ち上げ、様々なアイデアを出し合い、教科書の事例地になっている地域等を巡り、教材研究を深めています。年々、参加者が増えてきているのも頷けます。

さらに２月には、附属坂出小学校で授業公開とその年の各郡市の研究成果を交流する研究フォーラムが開催されています。このフォーラムを通して、その年の研究の振り返りが行われるとともに、いい意味での各郡市の競い合いにより、次年度の研究内容が明確になっていくように感じます。

○ 各郡市の活性化を支援する香社研

香社研の理事会や総会等で研究の基本的な方向について共通理解を図った後、定例会や夏季研修会において、各郡市の研究の独自性を認め、競い合うという運営スタイルは、各郡市の研究組織を活性化し、研究内を充実させているように思います。そして、このことが香社研という組織を活性化しているのではないのでしょうか。

今、各郡市では、７月２６日に三観で開催される夏季研修会に向け、提案内容が検討されています。

当日は、作成した提案を持ち寄り、意見交流するとともに、参加した先生方が「研修会に来てよかった。２学期は、提案された単元をやってみよう。」と感じてもらえる会にしたいものです。

香川県小学校教育研究会社会科部会
香 川 県 小 学 校 社 会 科 研 究 会
(部) 会 長 岡 根 淳 二

平成23年度 香社研研究主題について

《研究主題》

「社会科ノート」による思考力の育成

— 「社会科をひろくカリキュラム」の新たな展開による —

～ 平成23年度研究の視点 「学習評価を『自己調整』の過程からせまる」 ～

〈はじめに〉

平成23年度の香社研の研究を進めるにあたり、平成20年度四国社会科教育研究大会の研究と平成21年度・22年度の研究の成果を踏まえ、今後の研究を深めていきたい。そして、平成24年度香小研大会、平成28年度全国社会科教育研究大会に向けて、研究を積み重ねていきたい。

研究主題「社会科ノート」による思考力の育成にあるように、研究の基盤は、思考力の育成を「社会科ノート」の研究によって充実させることにある。その充実に向けて平成21年度は、『学ぶ意欲を高める学習の工夫』の視点から、平成22年度は、『学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める』という視点から研究を深めてきた。

21世紀を生きる子どもたちに求められる能力は、「幅広い知識と柔軟な思考力に基づく新しい知や価値を創造する能力」であり、その力をはぐくむためには、何よりも、一人一人の子どもたちの多様性を尊重しつつ、それぞれの強みを生かし潜在能力を発揮させる個に応じた教育を行うとともに、異なる背景や多様な能力を持つ子どもたちがコミュニケーションを通じて協働して新たな価値を生み出す教育を行うことが重要になると考える。（下図参照）

21世紀を生きる子どもたちに求められる力

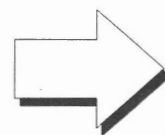
知識基盤社会

幅広い知識と柔軟な思考力に基づく新しい知や価値を創造する能力が求められる。

グローバル化

知識・人材をめぐる国際競争が加速するとともに、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性が増大

我が国の競争力や子どもたちの学力の低下



生きる力

確かな学力
豊かな心
健やかな体

21世紀にふさわしい学びの創造

子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び、子どもたち同士が教え合い、学び合う協働的な学びを創造

このような子どもをどう育てていくのかということを考えた時、自分が行ったことについて効力感をもつことが大切ではないだろうか。そのような感覚をもった子どもたちは、きっと自ら学びを創造していくであろう。また、その学びの過程においては、教師によって評価されるのではなく自らが判断して自己評価し、自分で自分の学びを調整する力が必要になってくるのではないだろうか。平成23年度は、これまでの研究を土台にして、上記のような国の動向をふまえ、「学習評価を『自己調整』の過程からせまる」という視点から、研究主題に迫っていきたいと考えている。

〈研究の方策〉

1 平成21年度～平成28年度の計画

21年度 (坂・綾)	22年度 (小,さ・東)	23年度 (三・鶴)	24年度 県大会(浅野小)	25年度	26年度	27年度	28年度 全国大会
Ⅰ期			Ⅱ期		Ⅲ期		
研究主題(3年計画)			◎ 21,22,23年度の研 究を受けて、県大会 の開催		◎ 全国大会(四国大会・県大 会)に向けての準備		
視点Ⅰ	視点Ⅰ	視点Ⅰ 視点Ⅱ	◎ これまでのまとめ と新しい教育の動き を見て、全国大会の 大会主題(仮)の設 定		◎ 26年度には、大会主題の決 定		
	視点Ⅱ	視点Ⅲ			◎ 新指導要領改訂が具体的 になってくるので、それを受け ての研究推進		
視点Ⅱ 視点Ⅲ	視点Ⅲ						

2 第Ⅰ期の計画

視点Ⅰ 主に1年次(平成21年度)

- ・学ぶ意欲を高める学習の工夫

視点Ⅱ 主に2年次(平成22年度)

- ・学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める

視点Ⅲ 主に3年次(平成23年度)

- ・学習評価を「自己調整」の過程からせまる

※今年度の重点

Ⅰ 「生きる力」の育成を図る「学力」の充実

1 生きる力と学力の3要素

「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」「たくましく生きるための健康や体力」などの「生きる力」をはぐくむための理念は新しい学習指導要領に引き継がれる。

また、教育基本法・学校教育法の改正において、教育の目標・義務教育の目標が定められるとともに、学力の重要な3つの要素が次のように明確化された。① 基礎的・基本的な知識・技能の習得 ② 知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等 ③ 学習意欲である。香社研では、平成21年度に③を、平成22年度には①と②を研究面から深めてきた。今年度、研究を進めていくにあたり、学習評価の面から①～③への対応を図りたい。

2 香川の教育課題への対応

学習や日常生活に「好ましくない行動」が起こる原因として、①学力不振、②周囲のサポート不足が大きいものとして挙げられる。今まで教師は、問題行動に「自尊心の不足」を根拠づける傾向にあったが、これは誤りではなかったかという指摘がある。現在では、学力を充実し、サポート体制の確立による「自己効力感」の意識が大切とされるようになってきている。

ところで、「自己評価」を進めることは、今、香川の教育の2つの大きな課題である「学力の充実」と「非行対策」と関わりが深い。それは、「学力の充実」こそが「非行対策」の最大の効果をもつことである。単に社会科教育という面だけでなく、大きな目で見ても、評価、とりわけ自己評価は重要である。

Ⅱ 平成23年度研究主題の探究

1 求める学習観・評価観

(1) 求める学習観

学習とは、「子どもを白紙の状態」としてとらえるのではなく、子どもが現在持っている「素朴な知識や概念」を組み替えたり、既有知識を強化する活動として捉える。そこでは、教師は、子どもが現在持っている「素朴な知識や概念」を捉えるために、子どもの反応を類型化して捉えることが大切になる。また、子ども自身が、①意欲をもって課題や問題に向かって積極的に学習に参加し、②じっくり観察・分析・批判し、③それを土台に創造的な発想を生かし、④深まった知識を組み入れて表現・論説して理解を深め、その過程で自分自身をモニタリングし、自己調整する評価を加え、⑤課題や問題を解決していく学習観、すなわち「再構成する学習観」に立つのである。そこで、この学習観を支える「学習の要訣」と「求める評価観」を次に述べる。

(2) 「学習の要訣」

子ども主義の学習観に立つ「学習の要訣」を、4つ挙げておく。

① 子ども中心

教師は、「何を教えるか」より「いかに教えるか」に立つ。教材を指導する「指導観」中心から、子どもの学ぶ意欲を常に中核におく進行役、介助役の役目をもつことから、学習材の開発を重視する。

② 批判的思考

批判的思考とは、注意深く、より正確な論理的思考である。何が問題なのかを見極めたり、データを集めて問題と照らし合わせたり、比較、関連させたりする論理的な方法により、問題に対する批判、考え方を展開し、「理論的な裏づけ」をする思考である。単なる懐疑的な批判ではなく、理論的な批判である。

③ 創造的思考

創造的思考とは、自主的で個性的なさまざまな視点から考えて、論理的、批判的な思考を交えながら既存の定義にとらわれない思考である。単なる想像ではなく、これまで学んできたことを生かしたり、再構成したりすることにより、新たな概念を自ら創り出したり、よりよい方法を考え出したりする。

④ 課題や問題解決と評価

課題や問題解決に向けて学習評価を行いつつ、探究的に取り組む能力や態度を育て、学校評価につなぐ。学習評価をどのように学校評価につなぐかについては、後で詳しく述べる。

(3) 求める評価観

学習評価は、学校における教育活動に関し、子どもたちの学習状況を評価するものである。学習評価には、目標に準拠した評価（観点別学習状況の評価と総括的にとらえる評価）、相対的評価、個人内評価がある。このうち目標に準拠した評価のうち「形成的評価における学習評価」を研究することとする。とりわけ、子どもが思考と表現の統一による活動を展開する構成主義的学習観に立ち、「再構成の学習」を図る中で、この評価の研究を進めていく。

学習の形成過程における評価が、学習の成果と効率を求め、教師が求める到達目標の達成度を点検・評価しながら、成果の定着度を上げようとしているのが、現状の評価観である。その上、その評価法が単なる技法または、評価のための評価になっていることが課題である。

子どもたちが、知識や技能を学び、受容していくことだけでなく、子ども自らの課題に基づき、知識を再構成し、生きて働く知識や技能として学んでいくことが求められている。教師の指導の結果を評価する学習評価ではなく、評価規準に基づく形成的な評価と子ども自身が自分の学びや成長を自己評価することとを一体化することが、構成主義的学習観に立つ評価なのである。

すなわち、「つまずきをなくす」ことが目的の学習評価ではなく、「つまずきを教師と子どもが共に生かす学習」を目指したい。そこでは、つまずきを教師と共に子どもたちが協働して自覚的に克服

しようと活動する姿がある。そこに、子どもたちは、自分の進歩、考えの変わったこと、自分で何ができるようになったか、まだまだできないことは何かなどを自己評価する。この自己評価は、自己効力感の高まりとなる。

このような評価観に立つ学習評価を進める上で有効な「評価方法」として、次の2つが挙げられる。

- ① パフォーマンス評価法

パフォーマンス評価法とは、目標として知識・技能を活用する力を位置付け、パフォーマンス課題とルーブリックを用いて評価する方法である。
- ② ポートフォリオ評価法

ポートフォリオ評価法とは、子どもの学習活動の過程や成果などの記録や作品を計画的に集積したファイル等を保存・活用して、子どもの学習状況を評価する方法である。

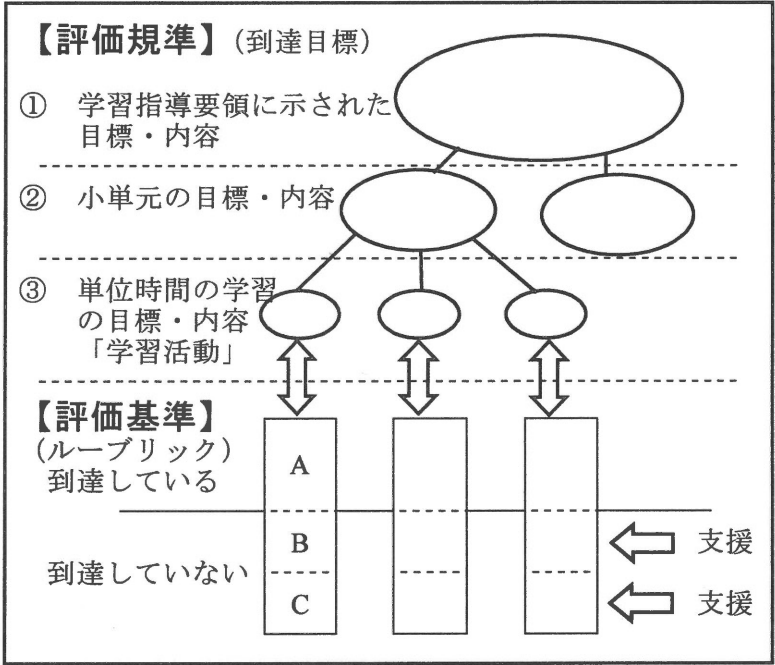
さて、このような評価観に基づいて評価するにあたって根本となるのは、「目標に準拠した評価」の目標についてである。このことについても、右図のように捉えて研究を進めていきたい。

2 「再構成の学習」を充実する単元構成の2つのプラン

求める学習観と評価観に立つ「再構成の学習」は、習得・活用・探究の学習の考え方と合わせて、単元構成をすることが求められる。社会科学習が、本質を間違ふことなく、すべての教員に広く実践され、子どもたちに「好かれ、力がつく」社会科学習にするための単元構成を考えていく必要がある。

従来、カリキュラムづくりにおいては、社会科学研究を専門とする教師による地域教材に密着した単元構成づくりが中心であった。このような単元構成は、専門の先生方にとっては魅力的なものであったが、社会科を専門としない先生方にとっては、難しく感じたり、取り組むためのハードルが高かったりして、一貫したカリキュラムを提案しても各学校において活用が難しいという課題があった。

そこで、より多くの先生方に社会科を好きになってもらい、広く取り組めるものにしていくために、単元構成の中核に、どの教師もどの子どももが持つ「教科書教材」を据える。単元構成もトピック的であったり、奇をてらうものではなく、だれもが取り組みやすいものにしていく必要がある。この「教科書教材」を活用するにあたって、次に挙げる2つのタイプの学習を今後の研究課題にしたい。もちろん、従来のような単元構成づくりも個人研究としては今後も大切にしていきたいと考えている。



A型	地域教材導入型	「教科書教材」を中心にするが、学習問題づくりに「地域教材」を取り入れた単元構成の工夫を行う。
B型	地域教材活用型	「教科書教材」で展開しながらも、活用の段階で「地域教材」を中心におき、「活用」の学びを重視する単元構成の工夫を行う。

ここでは、A型とB型の2つのタイプの単元構成の具体例を挙げておく。(評価規準等省略)

A型

第6学年 単元名「縄文のむらから古墳のくにへ」

単元構成(全8時間)

【第1次】(1時間)

地域に残る遺跡を調べよう。

- ◎ 地域に残る遺跡を見学し、自分たちの祖先の暮らしに関心をもつ。
- ◎ 教科書を概観し、学習問題を設定し、学習の計画を立てる。

地域教材

【第2次】(1時間)

縄文時代の暮らしについて調べよう。

- ◎ 三内丸山遺跡の資料をもとにして縄文時代の暮らしについて衣・食・住の観点から調べ、ノートにまとめる。

【第3次】(2時間)

弥生時代の暮らしについて調べよう。

- ◎ 板付遺跡の資料や米づくりのむらの復元図などから調べたことをもとに米づくりが始まったところの人々の暮らしの様子を話し合う。
- ◎ 吉野ヶ里遺跡の資料をもとにして、むらからくにへとまとまっていく様子をつかみ、ノートにまとめる。

道徳	
主題名	日本らしさを受け継ぐ心
内容	4-(8)

【第5次】(1時間)

学習してきたことを年表にまとめ、時代の特徴を考えよう。

- ◎ 各自がまとめた年表を交流し合い、縄文時代からの米づくりによる人々の暮らしの様子の変化や国土の統一の様子等を考える。

【第4次】(2時間)

大和朝廷による国土の統一の様子について調べよう。

- ◎ 大仙古墳をもとにして、古墳は、何のために、どのようにしてつくられたのか調べ、ノートにまとめる。
- ◎ ワカタケルの銘が入った江田船山古墳と稲荷山古墳の分布をもとにして、大和朝廷の権力の広がりについて考え、ノートにまとめる。

- 縄文時代は、狩猟や採集が中心の生活で、季節に合わせて暮らしを送っていた。
- 米づくりの技術や大陸からの文化が広がり、人々の生活が変化した。富の蓄積により、争いが起こり、むらから国へとまとめられていった。古墳時代には、大きな権力をもつ王や大王が誕生し、大和朝廷によって日本の大部分の地域がまとめられた。

B型

第5学年 単元名「自動車工場と消費者をつなぐ販売店のはたらき」

単元構成(全9時間)

【第1次】(1時間)

身の回りの工業製品を集めて教科書を参考に自分たちで分類し、工業製品と生活のかかわりを調べ、その中から自動車生産を取り上げ、学習問題をつろう。

- ◎ 工業製品を機械、金属、食料品、石油化学、繊維工業などに分類し、日本の工業を概観する。
- ◎ 日本の工業生産は、機械工業、とりわけ自動車工業が生産の中心であることをつかみ、学習問題をにつくり、今後の学習計画を立てる。

【第2次】(3時間)

自動車生産の特色と自動車工場と関連工場働く人の工夫や努力を調べよう。

- ◎ 教科書や資料集、映像教材から自動車を早く正確に組み立て、それを輸送するための様々な工夫について調べ、ノートにまとめる。
- ◎ 原材料の入手や生産の工程、関連工場とのかかわりなどを絵カードに書き、流れ図にまとめる。

【第3次】(2時間)

自動車生産にかかわる働く人の姿を自動車販売店を見学して調べよう。

- ◎ 自動車販売店と自動車工場のつながりについて予想し、ノートにまとめる。
- ◎ 自動車販売店(香川トヨタ本店)を見学し、働いている人の姿や仕事ぶりを見学したり、仕事へ向かう姿勢や思いなどを質問したりして、ノートに見学記録としてまとめる。

地域教材

【第5次】(1時間)

未来の車づくりを考え、自動車会社に提案しよう。

- ◎ これまでの学びをもとに、自分たちで未来の自動車について考え、企画書にまとめる。

【第4次】(2時間)

よりよい車づくりに向けての仕事について考えよう。

- ◎ 見学を記録したノートをもとに、仕事ごとに工夫や努力についてまとめる。
- ◎ グループごとに、販売店で働く人の立場になって、自動車販売店の課題を解決する話し合いを行うことを通して、自動車生産に関わる人々の思いや願いをノートにまとめる。

地域教材

- 日本の工業は、効率化された工場では、生産性を上げようと日々努力を重ねてきている。また、そこに働く人々の工夫や努力によって、消費者のニーズに合った自動車を生産したり、環境や安全に配慮した自動車の開発に力を入れたりしている。
- 地域にある自動車販売店は、消費者と工場をつなぐという点で自動車産業を支える重要な役割を果たしている。
- 工業に携わる人は、消費者のニーズに合ったよりよい製品を作り出そうと、日々努力している。

3 「意欲」「思考」「評価」を「再構成の学習」につなぐ

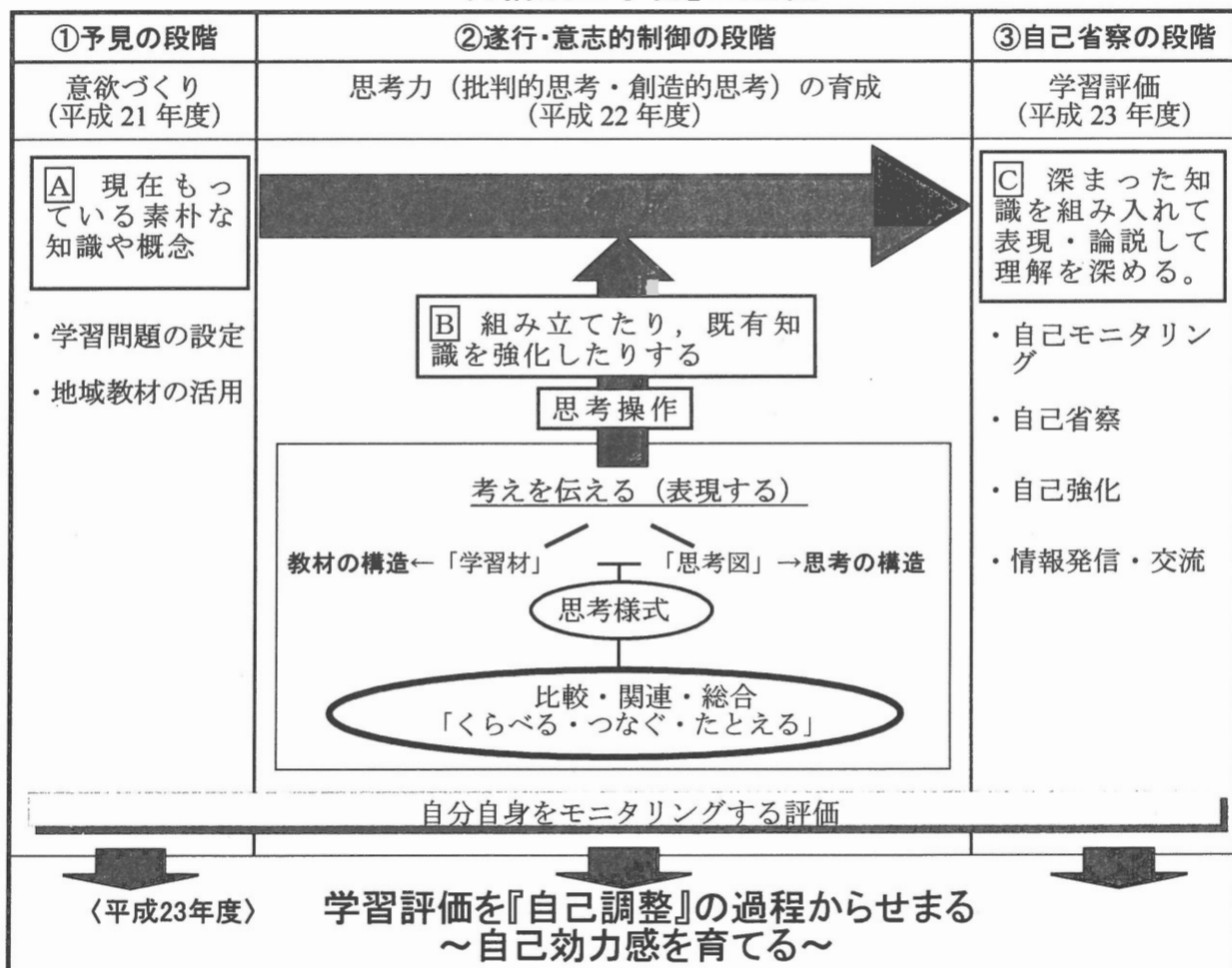
(1) 自己調整の過程としての「再構成の学習」

平成 20 年度四国大会「社会科をひらくカリキュラム」の研究を基盤にして、平成 21 年度は、「意欲づくり」について、平成 22 年度は『学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める』という視点から主に「思考力」に着目して研究を進めてきた。平成 23 年度は、「学習評価」の研究に取り組むが、これで第Ⅰ期の研究を「意欲」「思考力」「学習評価」としてまとめることができる。

そこで、ここでは、意欲、思考力、学習評価の研究をつなぎ「再構成の学習」として、その概念をまとめていくこととする。

学習は、3つの段階をサイクル活動として展開する。3つの段階とは、「予見」「遂行・意思的制御」「自己省察」である。大まかに言えば、「予見」は学習場面を設定し、意欲的に取り組む計画を立てる段階である。「遂行・意思的制御」は思考と表現の統一による再構成を図ることによって、思考力を育てる段階である。「自己省察」は、総括的な評価を入れた自己評価をする段階と言える。この3つの段階の活動を通して「自己効力感」を育てていくことが重要となる。このことを視点にして、研究の概要を次の図のように考える。

「再構成の学習」の過程



予見の段階では、学習場面を設定し、取り組みの計画を立てる。自己効力感をもって目標設定、課題設定し、方略プランニングと合わせて計画するのである。遂行・意思的制御、自己省察の段階においては、自己モニタリングをしながら自己評価、自己強化をするという自己調整を図る学習を目指している。

思考力は、図のように、**A**「現在もっている素朴な知識や概念」を、**B**「組み立てたり、既存知識を強化したり」して、**C**「深まった知識を組み入れて表現・論説して理解を深める」よう再構成する

ことによって育てられる。すなわち、思考力は[A]から[C]に高めることによって育てられる。その高める過程の活動が、思考様式の活動であり、自分自身をモニタリングによって自己評価しながらの活動になる。

この思考様式による活動は、考えることと伝える・表現することと合わせて「考えを伝える(表現する)」活動である。そのための「思考図」の開発は昨年度重点を置いて研究を進めてきた。思考図については後で詳しく述べる。

(2) 意欲づくりと「学習問題」の設定

① 意欲づくり

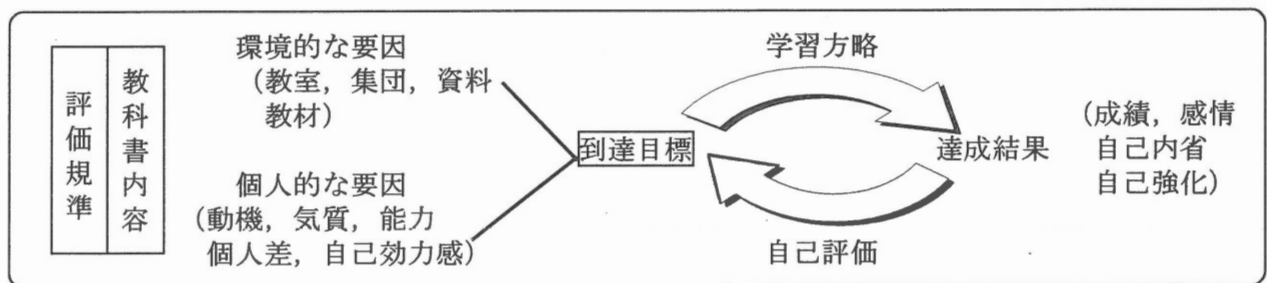
～ 平成21年度研究の概要参照 ～

② 学習問題の設定

「学習問題」の設定にあたり、まず、学習指導要領の目標・評価規準をもとにして、教科書内容とともに、学習内容を明確にすることが前提となる。その上で、子どもたちが意欲をもって主体的に学習を進める「計画」を立てるのである。その「計画」にあたってのいくつかの要点を次にあげておく。

ア 達成目標の2つの考え方に立ち、個に応じる学習が進められるよう目標を立てる

達成目標には、「習得目標」と「遂行目標」の考え方がある。習得目標とは、新しい能力を開発すること、自己効力感を高めること、困難な課題をやり遂げること、理解することに焦点をあてた目標志向性が高いものと言える。「遂行目標」は、自分の地位の向上や、標準化された基準に即して良い成績をあげることや他者との比較によって高い地位を探ることが強調されたものである。この2つの目標の考え方に立って、達成目標の考え方を図示したのが次のものである。



イ 学習の「計画」は、その時の「社会事象」を課題にして立てる

今までの学習は、学習の「計画」を立てるというより「導入」の考え方が主たる流れになっていた。そのため、単なる日常経験や、教科書等による単元の概観などからの学習の始まりで、「学習問題の設定」を行うことが多く見られた。

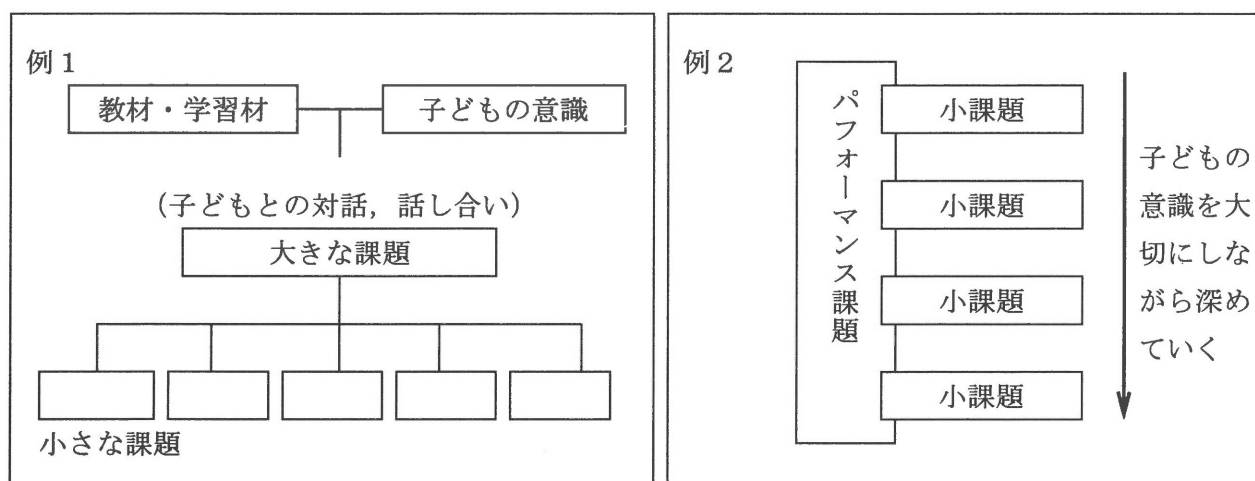
「再構成の学習」は、この「計画」の段階を重視する。そこで、「計画」の段階において、現在、課題となっている社会事象の課題や今までの学習成果からの発展としての課題による「学習問題の設定」が望まれる。パフォーマンス評価においては、パフォーマンス課題の設定がこれにあたる。パフォーマンス課題では、学習の見通しをもち、どのような表現(パフォーマンス)を行っていくのかが、子どもがはっきりとつかんでおくことが最も大切である。そのため、必要に応じて社会事象の内容を教科書等を使用して理解を深めていく「習得」の学習も必要となってくる。このことを踏まえて「学習問題の設定」を行い、学習の問題解決の見通しを立てることが、この「計画」の段階の活動となる。

ウ 課題・学習問題関与意欲を高める

考える力を育てるには、課題や学習問題を解決する問題解決的な探究の学習において、課題や学習問題に関与する力の意欲が強いことがポイントである。では、課題を学習問題に関与する意欲を高めるにはどのような工夫を行えばよいか、図で示す。例1は、子どもと教材を出会させた後、子どもと教師の対話によって、クラス全体の大きな課題をつくり、そこから、グループや個に応じた課題へとおろしていく例である。例2は、大きなパフォーマンス課題を設定して、課題解決のための小課題を子どもと共に作り、子どもの意識を大切にしながら、意欲を高めていく例である。このように、課

題意識を深めるためには様々な方法があるが、児童の実態や、教材によって選択する必要がある。

〈課題・学習問題関与意欲の高め方の例〉



(3) 学習内容と学習形態

① 授業のタイプにより学習の性格を明らかにする

授業は、いつでも同じようなスタイルで行うのではなく、授業のタイプによって学習方法を変えていくことが大切である。下に、授業の3つのタイプを示す。

ア 教材反応学習・・・基礎・基本の事項の徹底や学び方の確実な習得をねらいとする授業のタイプである。地図指導や資料の読み取り、事項や用語の把握を図り、きちんと分かることを徹底する授業である。教師は、子どもの教材への反応を見極め、「個別化」のための援助、指導を行う。

イ 反応類型学習・・・大まかな授業の流れとしては、まず、どの子も共通に基礎・基本の事項をつかむ。そして、その事項をもとに、表現と思考を組み合わせながら基礎・基本の内容に高めていく。子ども自らが、自分たちの反応を類型化する過程で、教師は個々の反応を見極め、指導の「個別化」と、学習の「個性化」を求めていく。

ウ 課題選択学習・・・子ども一人ひとりが、自らの興味・関心に基づいて課題を選択し学習を進める。そして、何を学ぶかという学習の対象となる教材の選択をする。と同時に、どのように学ぶかという学習の方法や進め方をも選択する。つまり、課題によって、教材と学習方法の選択が子どもに任されるのである。創意を生かした自他の学び方や考えのよさを認めながら、個性化を目指す授業の展開である。

② 内容による学習形態のちがいを

内容	学習形態	特色	学習材開発のポイント
習得の内容	教材反応学習	一斉学習、個別指導 共通教材、共通表現 個別化、個人差に応じる学習	どの子にも基礎・基本の内容の確実な定着をめざす個別的な学習材の開発
活用の内容	反応類型学習	子どもの反応を学習材に 共通な課題や異なる課題の交流 により一定の概念をつかむ	習得した内容や方法を活用し、活用する力（思考力・判断力・表現力等）を育成するための学習材の開発
探究の内容	課題選択学習	課題づくり、課題選択 課題ごとの探究・表現 多様な見方・考え方による概念 の交流により個性化を図る	選択した課題ごとに子ども自らが個性を生かして探究していくことのできる学習材の開発

(4) 思考力の育成

① 思考力を育てること

ア 思考力の発達

子どもの思考力は、経験を通して得たもの、こと、人について思考を働かせて解釈し、説明する能力を獲得することで発達していく。その過程は、技術（できる・できそう）から科学（わかる・なす）への発展の過程といえる。技術（できる・できそう）は、もっぱら対象にあたって、興味と断片的な知識をもとに知ろうとし、それを利用しようとすることに関心が向けられる。そこで、簡単に問題解決して目標に達すればそれで終わってしまい、その過程を説明することはない。科学（わかる・なす）は目標達成のために、対象にあたって知り、その取り組みの結果に終わらず、さらに深く解決過程を意識して説明していくことに特徴がある。

このように、思考の発達は、目標に達することに関心をもち、周辺の活動の段階から始まって、具体的活動に意味を意識する段階を経て、最後に、反省的思考にもとづいた論理によって意識的に行動する段階へとすすんでいく。これを、ピアジェは、思考の発達の筋道といい、「周辺から中心への発達」として、特徴づけている。

イ 思考力を育てること

(ア) 思考の構造と思考力の内面化

思考力を育てるとは、「ものごとを構造的に把握する態度を育てることである。構造的な把握を行うために、種類や用途、場所、時間経過などで分析したり、類別したり、関係づけたり、条件を変えたりしながら、思考そのものが特色としてまとまっていなければならない。思考力を育てることは、知識を構造化している過程としてとらえることが大切である。

思考力は、従来は、ただ、感受性、記憶、言語、数、推理などばらばらな能力のよせ集めとして、取り扱われてきた。そのため、これら個々の能力を別々に訓練することによって、思考力を発達させることができるものとしていた。だが、断片的な能力の訓練では、たとえ知識として覚えたり、技能として習熟できたものであっても、それだけで、思考力が育つことにはならない。

確かに、読み、書き、計算の技能は、思考力の発達の重要な道具である。しかし、その技能自体が、思考力の発達の原動力ではない。例えば、ことばが読めることと、ことばの意味を理解することとは違う。読みの技能は、習熟だけで獲得できるが、意味の理解は論理的思考の構造を前提とする。そして、この思考の構造は、子どものそれまでの成熟、経験、知識、技能などが組織的に統合されている全体なのであり、子どもの思考構造とのかかわりの中で、学習により、生きて働く思考力になるのである。

思考力は、正しい知識の積み重ねだけで思考力を伸ばそうとしてきた伝統的な教育方法で育たない。思考力を育てるには、子どもに正しい知識を理解させる手立てとして、わかりやすいことばで説明する、具体的な身近な例を示す、実験や実習を取り入れる、視聴覚機材を利用する、ユーモアを交えるなど、様々な工夫をして、わかる授業を進めなければならない。しかし、子どもは必ずしも教師が意図した通りの知識を理解するとは限らない。理解したように見えても、誤解、曲解が生じている。子どもは、教師の教えたことがらを覚えることはできる。しかし、そういう知識は、不安定で活用、応用がきかない。

この点から考えると、思考力を育てるために大切なのは、正しい知識の理解に当って、過ちやつまずき、意識のずれを自分で発見して、それを修正していく過程である。この自己評価を伴う活動は、思考の構造の中に確実に組み込んで、より正しく深い理解を進めていくことになる。これは「思考力の内面化」と呼ばれている。

このように、思考の質的な発達を促すためには、活動がある点でせき止められるような状況に立たせることが必要である。このせき止められる状況は、社会的事象の矛盾や対立の場面であり、課題や学習問題の設定などの学習活動に生かしていくことで、学習に意欲的に取り組むようになり、飛躍的

な発展にもつながってくる。

(イ) ことばと思考力

ことばは、思考の道具というよりは、思考の表現といった方が適切である。ことばに思考をつくり出すはたらきがあるわけではなく、思考が自分のことばを見出し、表現することになる。この思考による表現をもとに、話し合い活動としての交流が行われる。その際、表現することばがうまく選ばれなかったり、語彙が乏しかったりすると、思考が深まっていけない。豊かな思考は一度には成立しない。つまづきを克服するために、表現した自分のことばを見直してみるのが大切になってくる。この見直し、修正の時間こそ思考力を育てる上で大切なのである。

このように、話し合い活動・交流は、子どもの創造的思考の表現なのである。考えや思いを相手に理解されるように表現しながら、集団の中の個のかかわりとして、相手のことばの意味を見定めるのである。話し合い活動は、創造活動そのものであり、ことばの深層構造の部分は論理的な言語表現によるものであるのに対し、表層の構造は、創造的な言語表現、創造的思考によるものである。

② 「教材の構造」と「思考の構造」の明確化

ア 教材と学習材

「教材」とは、教科書教材に代表されるように、ある一定の目標を実現するために、基礎・基本の事項や内容を精選して取り入れた素材である。その形態は様々で、事物・事象という形、映像という形、言語や記号で表現した形など多様であり、一定の認識やイメージをもたせることができる。しかし、個々の子どものもつ認識・イメージづくりに応じるものとは言えないことから、従来は、教科書解釈や教材分析による教師の指導方法の工夫により補ってきた。

それに対して、「学習材」とは、個に応じた学びができる教材であり、「操作材」ともいえる。子どもの個々の学びが成立するためには、教材のもつ価値を十分に踏まえ、子どものもつ具体をもとにして、自然・社会・生活の事象と結び、具体的操作や形式的操作を通して思考や表現を促し、個々の子どもの認識やイメージを深化・拡充させていくことが重要である。今後、この「学習材」の開発が一層望まれる。

イ 「教材の構造」を明らかにする

香社研では、平成20年度四国社会科教育研究大会において、社会科の学問的本質に立った「社会科をひらく」を論じ、方法として「ノートによる思考力の育成」に取り組んできた。これを基盤にして、教材と学習材について研究を進めていくことにする。

さて、教材は、どの教科等も学問的内容を子どもの発達や興味の実態に合うよう科学や芸術・文化から選ばれたもので構成されており、①「共通教材」として教科書・補助教材 ②「自主教材」として子どもが自主的に活用する参考図書、インターネット、その他の資料 ③「教師教材」として教師・専門家などが提供する資料があげられる。ところで、教材は、「素材・資料」ではない。教材は、学習の目標を達成するよう素材・資料を発達に合わせ精選し、価値づけたものである。このことから、①は教育法規に定められた教材であるのに対し、②と③は素材・資料を教材化しなければ「自主教材」「教師教材」にはならない。

しかし、日常の授業を見る時、①の教科書などの主たる教材によって発問と応答・支援による一斉授業の中で、②の子どもたちが自主的に調べた資料によって挙手による指名で学習内容をふくらませたり、③の教師などの資料・説話で深めたりしていることが多い。この場合、②の自主的に調べた子どもたちにとっては、自分の調べを入れた授業展開で意欲をもち満足であろうが、それは一部の子どもたちだけの学習の成立としかならない。このことが、社会科学学習を楽しくしていない大きな原因とも考えられよう。すべての子どもたちが社会科学学習を好きになり、思考力を育てる学習にしたいものである。

そのために、①「共通教材」②「自主教材」③「教師教材」を入れた「教材の精選」を明らかにする教材の構造化を授業スキルとして昨年度は取り組んできた。まず、「教材の構造」は、学習指導要

領と教科書や補助教材を分析し、「基礎基本の事項」と「内容」を明らかにし、それを基盤とする。(A)

次に、「教材の構造」の中心になる「共通教材」である。教科書・補助教材の内容を中心教材と関連教材を構造化して図示する。(B)更に、その図示の周辺に「自主教材」と「教師教材」を関連付ける。(C)この際、子どもが自主的に調べた資料を教材化する手立て、及び教師や専門家の資料をどのように教材化するかが今後の研究の課題となる。では、「教材の構造」について具体例を紹介する。

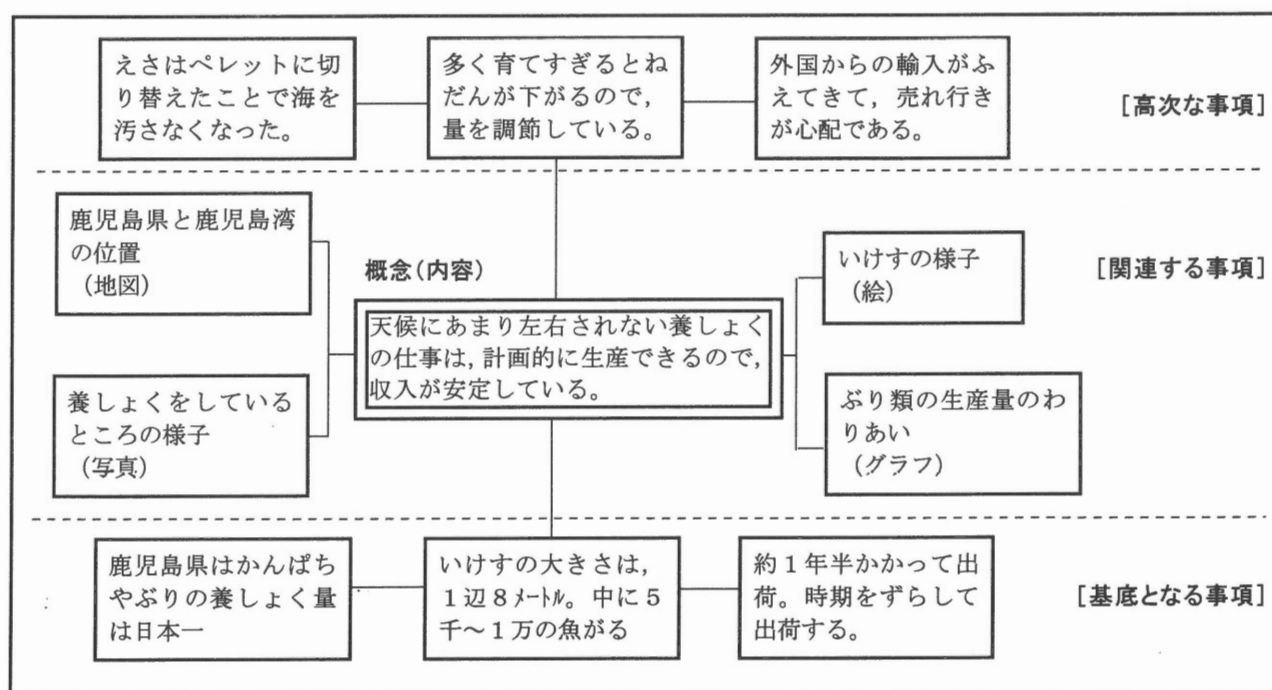
(A) 教科書分析(基礎・基本の事項と内容)

第5学年 単元名「水産業のさかなな枕崎市」

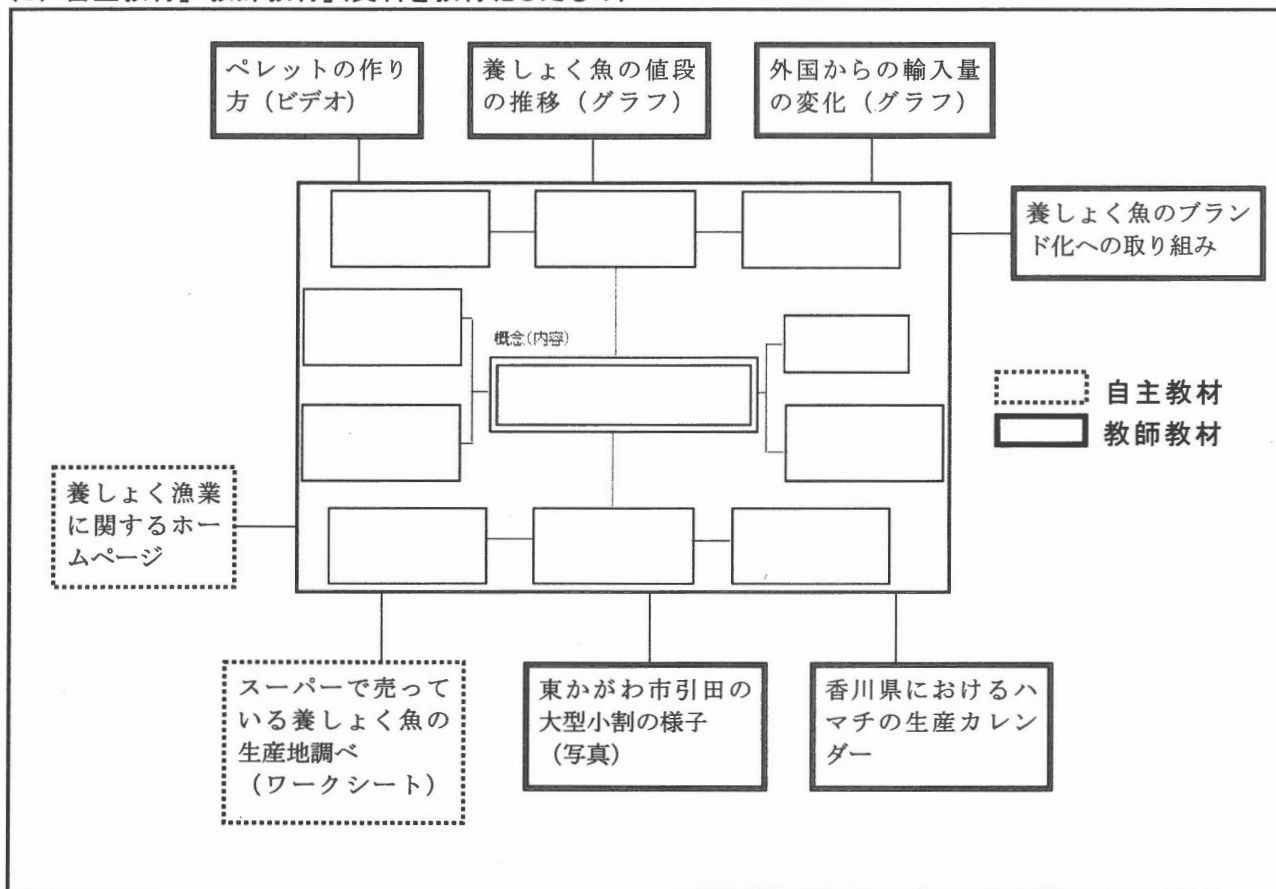
型	頁	教科書にみる基礎・基本の事項(○)と内容()
探究型	27	○まきあみ漁は効率がよい ○かつお節 ○遠洋かつお船は冷凍設備がある ○一本づりは、新鮮さが保たれる 遠洋かつお漁は、まきあみ漁と一本づりの2つの特徴を生かしている。
	28	○漁業生産量 ○沿岸から200海里水域の漁の制限 ○遠洋漁業の減少 ○漁業で働く人の減少 ○輸入の魚が増えた ○魚より肉を好む食生活 日本の漁業では、年々、魚の生産量が減っている。
	29	○日本船による魚の生産の減少 ○養しよく漁 ○さいばい漁業 ○作り育てる漁業 ○とる漁業 ○稚魚 作り育てる漁業でも力を入れている。
	30	○かんぱち ○ぶり ○養しよく
	31	○いけす ○計画的に生産 ○漁業協同組合 ○えさは、あじやいわし ○ペレット状のえさ ○多く育てすぎると値段が下がる ○量の調整 計画的に生産できる養しよくの仕事は、収入が安定している。

〈教材の構造〉

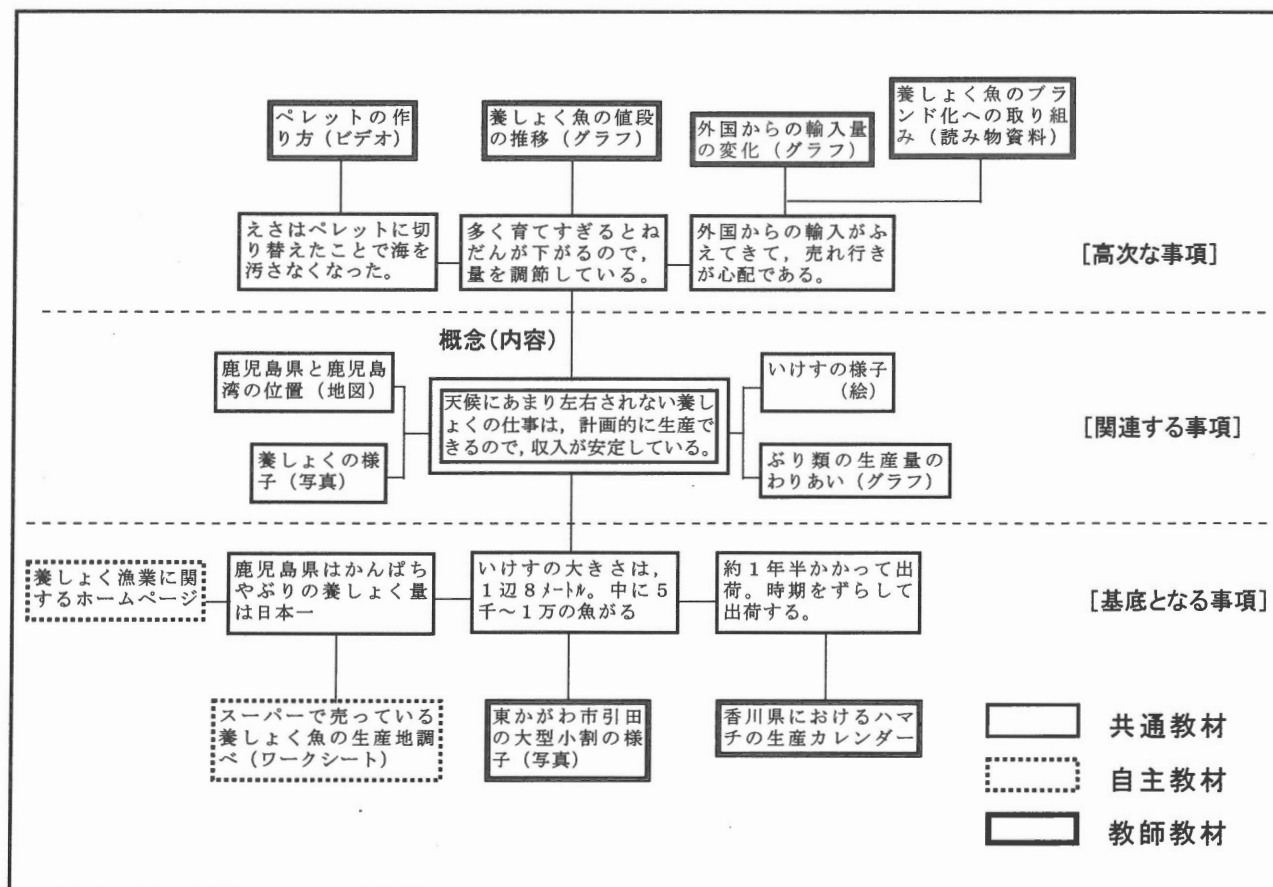
(B) 共通教材(教科書・補助教材)1時間分(教科書見開き2ページを中心に)



(C)「自主教材」「教師教材」「資料を教材化したもの」



(D)「教材の構造」完成図



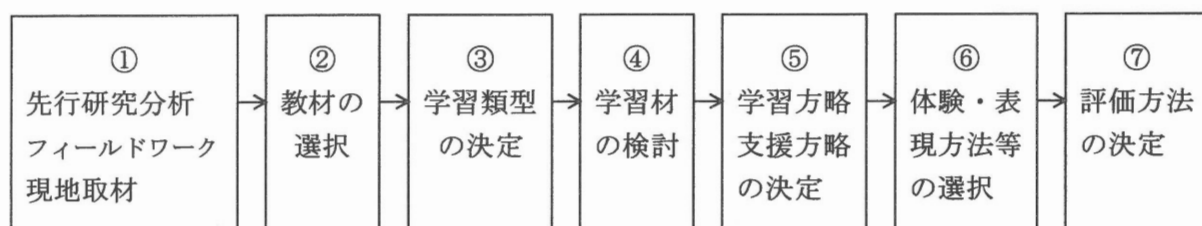
ウ 教材を学習材として「思考の構造」を明らかにする

学習材の開発は、単に子どもが意欲をもって学習に取り組める、あるいは操作活動により授業が活性化するというだけをねらっているのではない。また、地域教材を単に授業に取り入れることを指すのではない。研究テーマにあるように、思考力の育成こそが一番のねらいである。

そのためには、単に学習材を用意するというのではなく、学習材に合わせて、学習類型を選択したり、体験や表現方法を選択するといった一連の流れが重要になってくる。このような一連の流れをまとめて「学習材の開発」と呼びたい。

つまり、「学習材の開発」においては、思考力を育成するために授業をどうコーディネートするかということが大切なのである。

《学習材の開発の流れ》



※ この授業づくりの一連の流れを**学習材の開発**とよぶ

③ 思考図

学習材の開発を行うことにより、より深まった思考力の育成が期待できる。思考力は、既存の知識の上に、新しく学んだことを取り入れて、比較・関連づけ・総合しながら再構成を行い、新しい知をつくり上げていく過程で育まれる。教師は、子どもがどのような思考の過程を経て、新しい概念を再構成していくのか見通しておくことが必要である。それができていなければ、適切な支援を行うことは難しい。

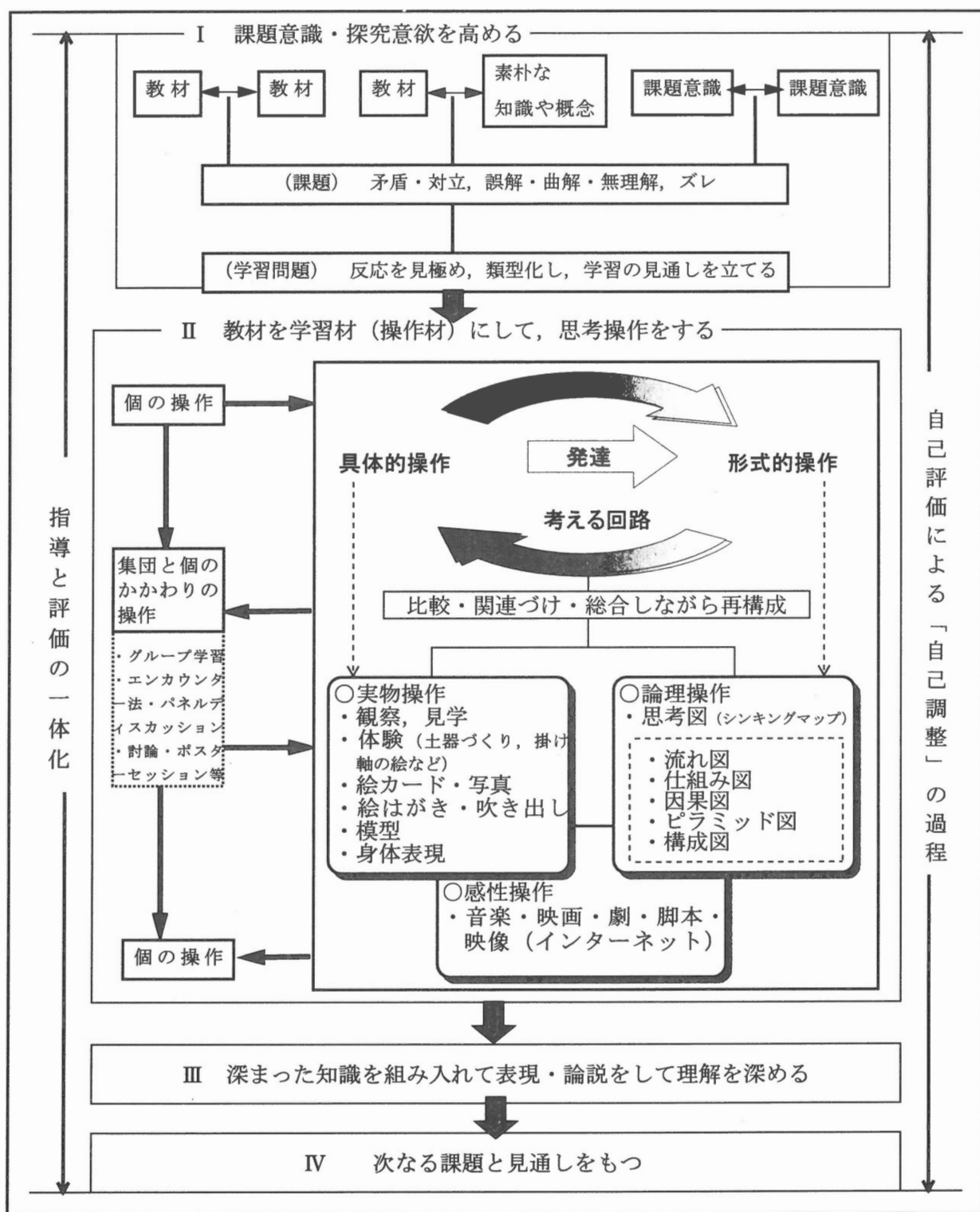
そこで、学習材の開発に合わせて、「思考の構造」(子どもが思考する道筋)を明らかにすることに昨年度取り組んできた。その中心としたのが、「思考図」(シンキングマップ)の活用である。研究したことが日常の授業場面で具体的に活用できるようになってきていると感じている。

思考図(シンキングマップ)とは、考えを図式化することによって、発想の個別化と個性化を目的にしたもので、アメリカのハイルー氏やイギリスのベン氏などによって発表されたものである。その内容は、次のようなものである。その具体例については、後のページで紹介する。

- | | |
|-------------|--------------|
| ① ○(円)で考える | ② —(線)で考える |
| ③ □(四角)で考える | ④ 重ねる・立体で考える |

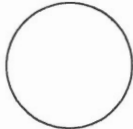
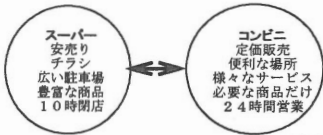
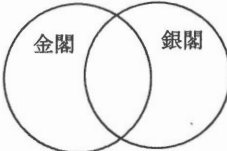
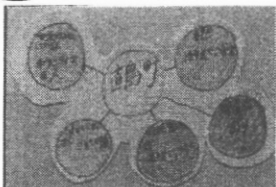
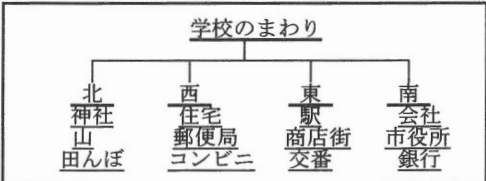
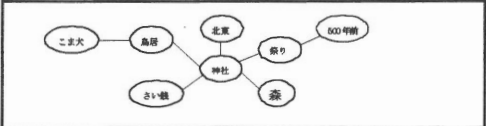
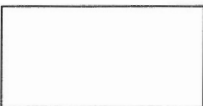
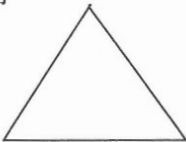
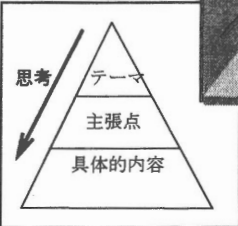
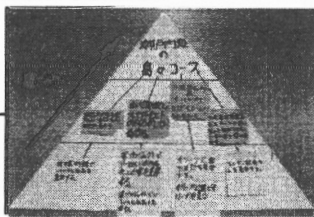
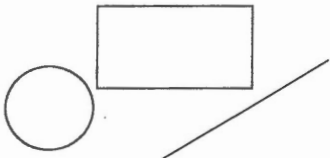
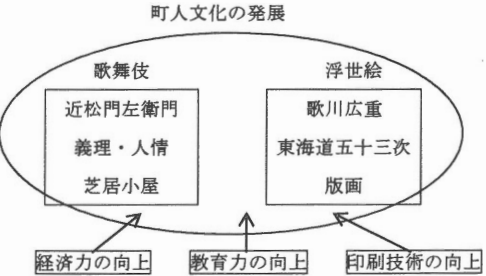
では、まず子どもがどのような思考の過程を経て、新しい概念を再構成していくのかその思考の過程について見ていきたい。

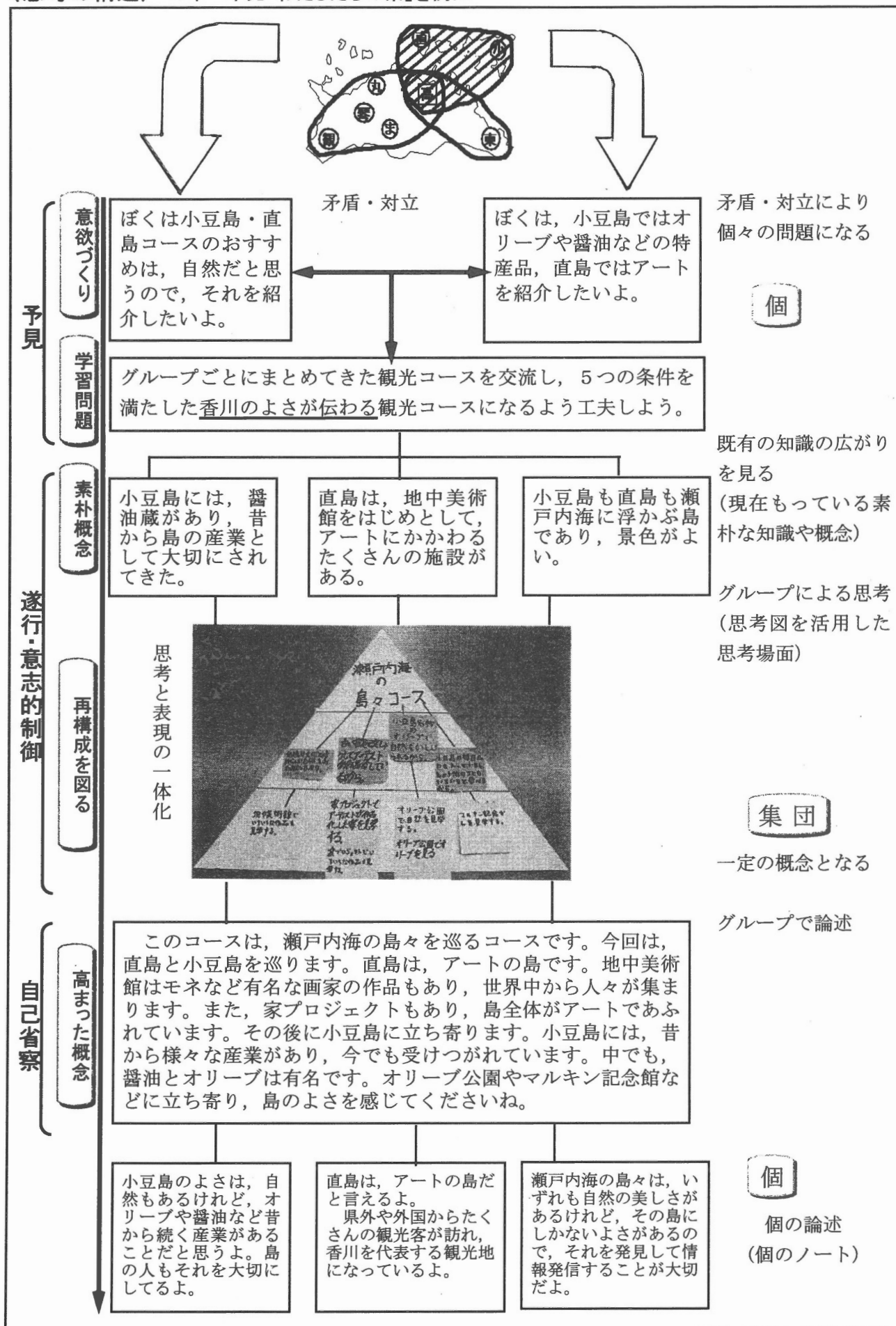
〈子どもの思考の過程〉



次に、思考図(シンキングマップ)の具体例を示す。

〈思考図(シンキングマップ)の5つの型〉

	名称	思考の様相	例
①	サークルマップ 丸 	分析する 比較する 仲間分けをする 自分の考えをふくらませる	  
②	ツリーマップ 線 	考えを整理する 自分の考えをふくらませる 発想を広げる	 
③	フローマップ 四角 	順序性を明らかにする 原因と結果をつなぐ	
④	ピラミッドマップ 三角 	自分の考えを積み上げていく 考えを概念化する 主張点を具体で述べる	 
⑤	コンストラクションマップ 丸, 四角, 線等の 構成・組み合わせ 	いくつもの考えを構造化し, 整理する	



(5) 個に応じた学習と集団と個のかかわり

～個に応じた学習を進めるよう「集団の中での個のかかわり」を明らかにする～

① 「集団と個のかかわり」とは

「集団と個のかかわり」は、集団の中での個のかかわりを意味する。従来、「個」と「集団」については、まず、個を育て、「集団」づくりをするという考えに立っていた。しかし、そうではなく、社会性の発達の研究から「集団」の中で「個」を育てるように進められ、「協働性」を育てることとして、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領に示されている。このことから、低学年は主に「対話」を、中学年以降から小集団、大集団でと、広まり、深まっていく。しかし、学習論には必ず、「個」→「集団」→「個」の過程を大切にしたいものである。

そこで、「集団と個のかかわり」の意味を述べておく。集団の中での個のかかわりの姿としての仲間グループは、学校での学びの中で自然に形成されたり、教師の意図性によってつくられたりする。その集団で個と個が納豆の糸のように「引き合い」「粘り合い」ながら、集団をつくり上げていくのである。

そこで、この集団の中で個と個が引き合う意味を考えてみたい。これには、2つの様相がある。

1つは、集団の中での個のかかわりが「個性」を育てることになることである。すなわち、個性を生かし、伸ばすことを、子のよさを伸ばすと考えたい。その様相には、次の3つの面がある。

◎知的な能力としての「知力」

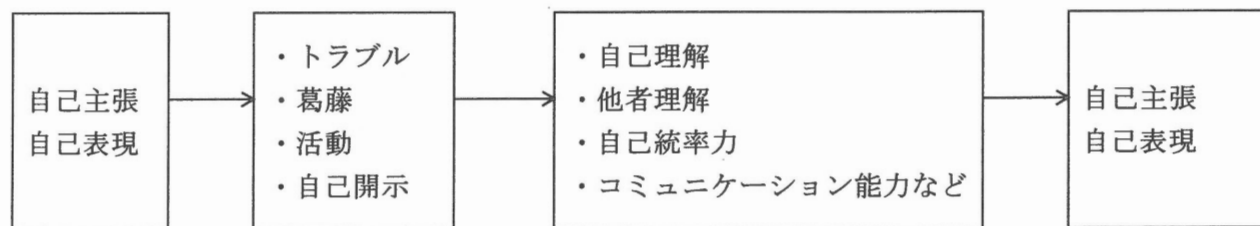
◎感じる力、活動する力、技としての力などの「表現力」

◎人柄とか性格としての「人間力」

このことから、集団と個のかかわりについてみる観点とは、知力・表現力・人間力という観点であり、学習に際しての支援・援助の観点になったり、学習記録の観点になったりする。

2つには、集団の中での個のかかわりが、「集団の中での生きる力」を育てることになることである。すなわち、「社会性」を育てることである。仲間との学び合い、互いの「引き合い」の中で、トラブルや葛藤が生じ、それを解決するには、相手の行動の意図や要求に気づくことや、自分の意図の中で一人一人が仲間意識を持ち、自分の役割の自覚や責任感、みんなの役に立つことの喜び、他人のことを考え、自分を制御することなど、相互に引き合いながら調整していく。その中で、自我の発達を伴いつつ、他者理解を深めたり、社会のルールを身につけたり、自己統制力やコミュニケーション能力を身につけたりしていく。この様相は、次のようにとらえることができる。

◎ 集団の中での個のかかわりをみる観点

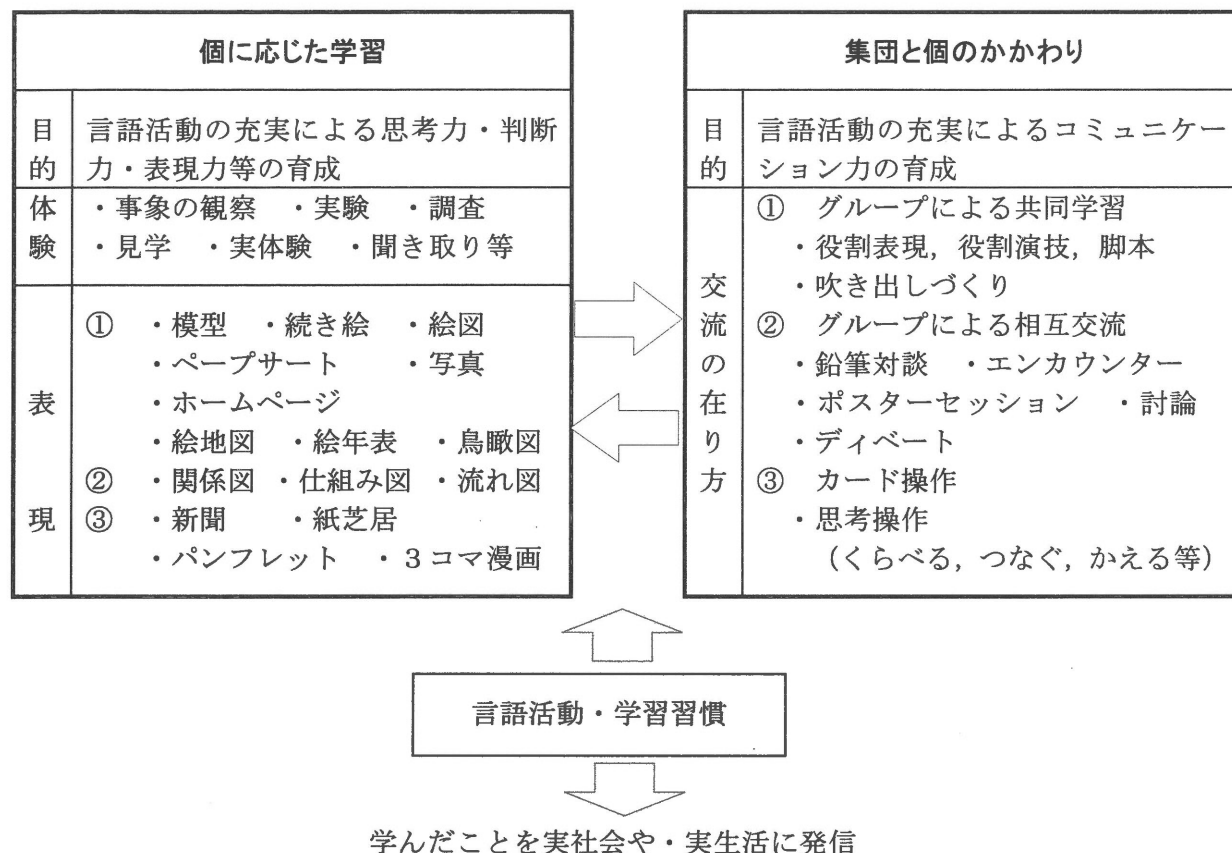


この「集団と個のかかわり」の活動は、相互交流として先の「思考の構造」で示したように、具体的には、グループ交流、エンカウンター交流、パネルディスカッション、討論、ポスターセッション等である。

② 「個に応じた学習」について

ところで、下図のように、「集団と個のかかわり」を大切にしたい個に応じた学習を進めることは、今求められている学習論の最大の課題なのである。それには、1つは、**A**個のもつ学習の個人差をどうみるかである。認知心理学では、「学習者が外界からの刺激や情報を取捨選択して取り入れ、それを分類し、変換して記憶したり、判断したりして自分の知識の体系の中に組み入れていく認知過程」を重視する。しかも、その操作の仕方には、個人差があることを認め、学習者それぞれの認知スタイル、学習スタイルを考慮していくとしている。2つには**B**個に応じた学習を集団と個のかかわりを大

切にして取り組む学習方略及び支援方略は、「学習の効果を高めることを目指して意図的に行う行動」であり、特に言語活動や学習習慣について研究を行うものである。



A 個人差のとらえ方

(ア) 認知スタイル

場独立型 	場全体の全体的な影響を受けずに、特定の対象を容易に認知するタイプ。仲間の考え方に影響されることが少なく、興味や好奇心に対する内発的な動機づけが強い。
場依存型 	場全体の影響を受けて、特定の対象を分離して認知するタイプ。他人の存在や考え方に左右されたり、外発的な動機づけが強い。
熟慮型 	課題が不確かなとき、思慮深く、慎重に反応するタイプ。問題解決において無駄の少ない解決行動で、よりよい方策を探す。
衝動型 	衝動的に思いつきで反応するので、拡散思考に向くが、非能率的な問題解決を示す。

(イ) 学習スタイル

学習は、学習者の積極的な役割を認め、知的操作を強調し、しかもその操作のしかたに個人差があることを認める。学習スタイルは、知覚・記憶・思考などの認知活動の様式に対する好みから、どんな場面で、どんな学習活動に訴えて学習するのが好むかといった、学習環境、学習活動のスタイルをいう。学習スタイルは、認知スタイル、学習方略を含めてとらえることができる。学習の個別化が強調され、重視されていることから、学習スタイルも個人差の一つとして考えることができる。

B 学習を効果的に行う方略

	学習材の開発による	
個に応じた学習	〈学習方略〉 言語活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成	① 事象への働きかけ ○ 観察・体験・調査・調べ ② 学習類型と学習材 ○ 教材反応習得学習 ○ 反応類型活用学習 ○ 課題選択探究学習 ③ 表現と学習材 ～情報発信のために～
集団と個のかかわり	〈支援方略〉 言語活動の充実を図るコミュニケーション力の育成	① 学び方の系統と多様性と発達段階 ② 学習スタイルと相互交流 ③ 達成目標 「ラーニング目標」とパフォーマンス課題、ルーブリック

(6) 「個に応じた学習」を支える言語活動と学習習慣

① 言語活動の充実

ア 言語活動とは

○ 言語活動の充実の在り方

研究テーマにある思考力の育成を考えていく際に、言語活動の充実ということは避けて通れない。なぜなら、今回の指導要領の改訂においては、活用する力(思考力・判断力・表現力等)を育成するために欠かせないものとして、言語活動の充実が図られた経緯があるからである。「個に応じた学習」と「集団と個のかかわり」という学習論に入る前に、まず、社会科として言語活動の充実をどうとらえたらよいのかということをはっきりしておきたい。

○ 言語活動にかかわる問題点

最近の実践において、言語活動の充実が一人歩き(自己目的化)して、文字どおり言語活動を取り入れることに懸命で、思考力・判断力・表現力等を育むという本来の意図が必ずしも生かされていないことが問題ではないだろうか。思考力・判断力・表現力等は、「付けたい力」でありながら、「付いていない力」になりがちである。

○ 言語の役割は何か

各学校で子どもたちの思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、レポートの作成、論述といった知識・技能を活用する学習活動を教科で行い、言語の能力を高める必要がある。言語の能力は、(中略)子どもたちが他者や社会とかかわる上でも必要な力である。

(中教審答申より抜粋)

〈言語の役割〉

- 子どもたちの思考力・判断力・表現力(=知的活動(論理や思考)の基盤))
- 子どもたちが他者や社会とかかわる上で必要な力
(=コミュニケーションや感性、情緒の基盤)

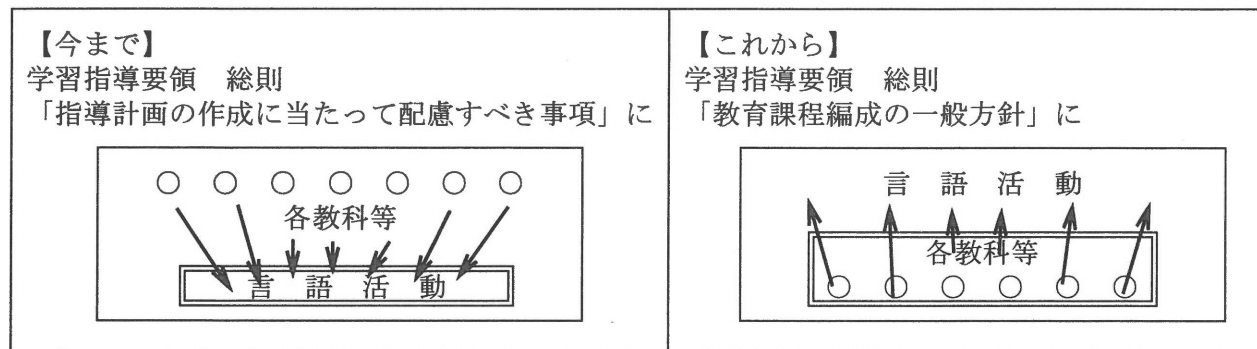
○ 非言語コミュニケーションの重要性

人間はコミュニケーションを行う時、言葉を使い互いの感情や意思を伝えあってもいるが、「目は口ほどにものをいう」といった諺にも示されているように、言葉よりも、顔の表情、視線、身振りな

どが、より重要な役割をになっていることがある。日常的に人間は複数の非言語的の手がかりを使いメッセージを伝達しあっている。子どもたちが集団の中で他者とのかかわる際に、言語によるコミュニケーションと合わせて、非言語によるコミュニケーションも重視していかなければ、真の交流にはならない。

イ 学習指導要領における言語活動のとらえ方

○ 今までとこれから



○ 教育活動全体でとらえる言語活動であるために

ウ 言語活動とは

「教科等で学んだ基礎・基本の事項や内容を、実生活や実社会の事象とのかかわりの中で、自分の思いや考えを目的をもった流れとして、論じ、語っていく活動」としてとらえる。

「国語科における言語活動の充実」と「他教科における言語活動の充実」のちがいは何か

○ 国語科における言語活動の充実

- ・ 目的・手段の二重性
- ・ 言語能力の育成それ自体が目的

- ・ 的確に理解し、論理的に思考し表現する能力
- ・ 互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力
- ・ 感性や情緒

- ・ 思考力・判断力・表現力等を育成する手段

○ 各教科等における言語活動の充実

- ・ 各教科等における言語活動は、教科のねらいを効果的に達成するその手段であるとともに思考力・判断力・表現力等を育成する手段



言語活動の充実が（とりわけ国語科以外の教科では）それ自体を目的とするのではなく、「思考力・判断力・表現力等をはぐくむ」ために取り入れられている。つまり、言語活動の充実は、「思考力・判断力・表現力等の育成」の効果的な方法・手段として位置付けられる。

エ 社会科においてどう言語活動の充実を図ればよいのか

○ 各学年の目標の改訂

「調べたことを表現する」→「調べたことや考えたことを表現する」

○ 言語活動の充実にかかわって重視したいこと

各学校においては、地域の実態を生かし、①児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、②観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ること。

（指導要領解説 社会科「指導計画の作成と内容の取り扱い」より抜粋 番号下線は大嶋）

①については、地域にある素材を教材化すること、地域に学習活動の場を設けること、地域の人材を積極的に活用することなどに配慮した指導計画を作成し、児童が興味・関心をもって楽しく学習に取り組めるようにすることが重要である。児童が実物や本物を直接見たり触れたりすることを通して社会的事象を適切に把握し、具体的、実感的にとらえることができるようにすることが大切になってくる。このことが、社会科における言語活動の基盤となる。

②については、調査・見学、体験などによって分かったことや考えたことなどを適切に表現する活動を効果的に位置付け、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする必要がある。調べたことや考えたことを表現することを通して、思考力の育成が図られる。ここに言語活動充実の意味がある。

○ 学習の進め方における具体的工夫

- ・ 問題解決的な学習の充実
- ・ 観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手して的確に記録する
- ・ 入手した情報を比較・関連付け、総合しながら再構成する
- ・ 考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく

② 学習習慣の確立

〈学習習慣〉

「自主教材」は、子どもたちが自主的に収集した参考図・インターネットなどの資料を教材化したものであるが、子どもたちが資料を収集するのは、主に学校図書であったり、家庭であったりする。そこでは、どうしても子どもによって、調べる資料の収集する意欲をもった学習習慣が大切になってくる。学習習慣を育てるとは、次のような要件が考えられる。

①授業がよく分かることが学習習慣の基盤となる。

②自分にもできるという成就感が学びの習慣づけになる。

③家庭学習が、授業とかかわりが深いほど学習習慣が育てられる。

④家庭学習の方法（学習ガイド等）が発達段階と応じて工夫されている必要がある。

⑤家庭学習は、学習習慣として、教師、家庭の励まし、認められることが効率を高める。

そして、子どもたちが仲良く協力的な関係の中で、安心・安定感のある学級・学校であることが大切である。そんな中で、学習習慣（学習ルール）は学校全体で発達を踏まえながら大きな枠組みがあり、その枠組みの中で、学級の特色を出すという調和が必要である。学習の準備、話の聞き方、発言の仕方、ノート書き方、いろいろな活動の仕方など多様な場面で、学校のルールの中で学校として教師と子どもが創り上げていくものである。

とにかく、教師は、「子どもが話し合いを楽しんでいるか」「子どもの思考をたくさん引き出しているか」「子どもの声をしっかり聞いているかを常に見て評価することが望まれる。」

Ⅳ 研究主題探究の姿を「社会科ノート」に生かす

1 「見えにくい学力」の評価を社会科ノートで

(1) 「見える学力」「見えにくい学力」の評価

現在、学力は、知識や技能にとどまらず学習意欲、思考力、判断力、表現力等を含むものというとなえ方をし、その育成を重視した授業づくりが重視されている。

そのためには、次のような視点からの授業改善を行っていきたい。

- 通知表や指導要録の評定のためにだけあるのではなく、授業の中での形成的評価として機能させる。
- 評価は知識・技能といった見える学力だけでなく、思考力等見えにくい学力も評価対象にできるような評価方法を開発する。

(1) 「見える学力」の評価

「内容知」における「見える学力」とは、主に都道府県名、主な山地、河川等の名称、歴史的事象等の社会的事象についての知識・理解といった学んだ結果身に付いた知識であり、これはペーパーテスト等で測りやすい。このような基礎・基本の事項の理解の上に立ってこそ、その教科ならではの思考が可能になることは明白である。

(2) 「育てたい力(見えにくい学力)」の評価

その一方「育てたい力」としては、その子ならではの「基礎・基本の内容」が挙げられる。これは、その子の学習過程での発言や表現物から、その子の思考の流れを読み取り確実に「定着」しているかどうかを見取るわけであるから、テスト等では簡単には測れないものであろう。

また「方法知(学習力)」については、まさに「育てたい力」である。

学習力には、論述力、討論力、論理的思考力、問題を追究したり解決したりする力などがあるが、それ自体、数値化が難しい。これらの力は、ポートフォリオやグループエンカウンター、ポスターセッション等を体験していく過程で、しかも教師の適切な指導のもとに身に付いていく力でもある。

現在主としてなされている学習指導は、主として見える学力を数値化して、どの程度到達できたかを見取り、少人数指導等の指導法の工夫・改善により、知識や技能の習熟度によって評価する傾向が強く打ち出されているものである。しかし、それは一面的な取り組みでもある。

社会科授業では、自ら主体的に調べ、調べたことを効果的に表現し、表現と思考の連続によって社会的事象の本質について考え、深めていく力を育てていくことを大切にしたい。そのためにも、「見えにくい学力」の評価の工夫をより一層重視したいと考えたのである。

評価は、通知表や指導要録の評定のためにだけあるのではなく、授業の中での形成的評価として機能させる。そして、評価は知識・技能といった測りやすい学力だけでなく、思考力等測りにくい学力も評価対象にできるような評価方法を開発していくこととする。

	測りやすい力	測りにくい力
知 識 (内容知)	漢字・計算等 基礎・基本の事項 (社会用語)	基礎・基本の内容 表現
学 習 力 (方法知)		ポートフォリオ グループ・エンカウ ンター ポスターセッション ディベート 等

そこで、子どもの行動や作品に着目して評価するものとして、パフォーマンス評価がある。ただ、その行動や作品等を評価する基準が明示されない限り、評価としての客観性や信頼性を得ることはできない。そこで、この課題を克服するものとしてループリック(評価指標)づくりを考えている。

ループリックとは、学習課題に対する子どもたちの認識の質的な転換点に

基準を合わせて評価の指標を段階的に設定する試みである。ループリックの研究実践を積んでいくことにより、より精度の高いループリックが作成され、到達目標の明確化による確かな学力の形成が

なされるのではないかと考え、今後ルーブリックの開発を行っていきたいと考える。

2 相互交流の視覚化を図る社会科ノート ～思考の構造の視覚化を図る～

(1) 相手に分かりやすく、自分の考えを表現する

相互交流に入る前に、まず自分の考えを相手にとって見やすいよう表現することが大切である。それには、2の表現の仕方で示した関係図、仕組み図、流れ図、新聞などの表現物をしっかりしたものにすることや思考操作（くらべる、つなぐ、かえるなど）のあとをノートなどに残しておくことが大切である。相互交流には、まず、このことが前提になる。

(2) 相互交流の視覚化を図る

相互交流は、音声言語で行われることが多いため交流後、どのような話し合いが行われたのか、交流によってどのようにお互いの考えを深められたのかが見えにくいのが現状である。そこで、音声言語での話し合いを文字化や図示化しながら、支援する方法について考えていきたい。

(3) 視覚情報化のポイント

① 話し合いの手順を共有する

話し合いの方法が毎回異なるようでは、子どもたちも戸惑うことが多く、話し合いも深まりにくい。そこで、いくつかの話し合いの方法をパターン化しておき、その手順について、教師と子どもが共有しておくことが大切である。そのことによって、子どもたちは、話し合いにスムーズに入れるようになる。

その共有の仕方であるが、クラスのあるグループをモデルとして、モデルの討議の進展に合わせて、教師がその構造をリアルタイムで板書し、視覚情報化することで話し合いの手順・ポイントを理解する方法がある。

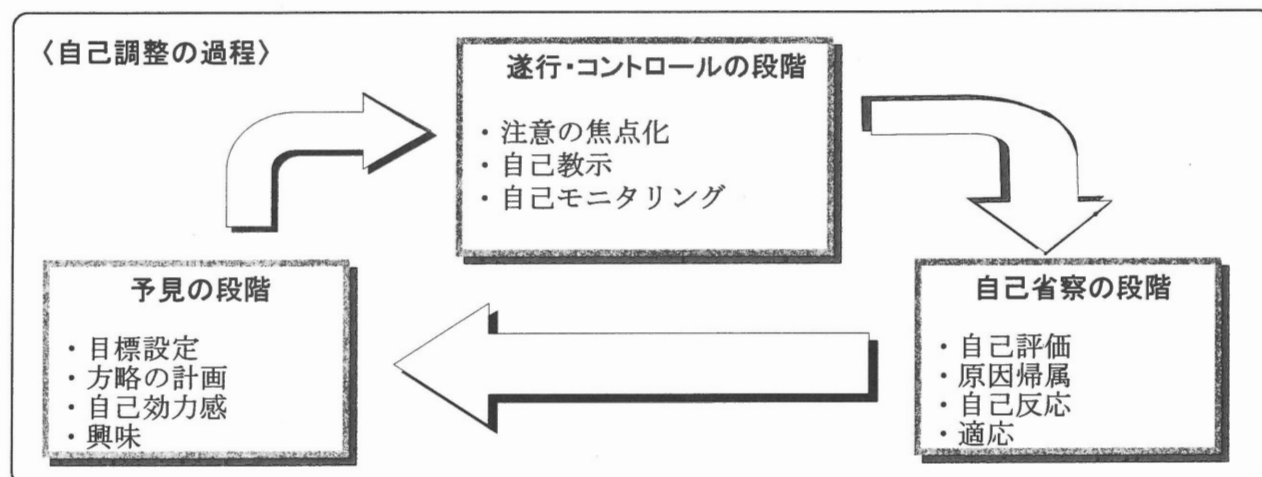
② 相互交流のあとを残す

相互交流のあとを残すと、グループによる話し合いがどのように行われたのかが視覚的に分かり、子どもの理解が深まっていく。そのためには、いくつかの方法があるが、グループで1枚の記録づくりなども有効な方法である。

その記録をもとにしてさらに他のグループと交流を行うと、考え方が交流でき、自分の考えを広げ、深めていくことができる。

3 「自己調整」の過程を社会科ノートに

(1) 学習評価を「自己調整」の過程でとらえる



「再構成の学習」は、学習を認知や情動といった個人的な過程だけでなく、人、環境、行動が相互に関係し合って展開するとしている。このように、学習を認知や情動の過程としてとらえることの上に、人と人とのかわりや学校・家庭・地域、教育情報資料などの環境や体験、奉仕活動、社会参画活動などの行動の過程としてとらえる学習を構想している。

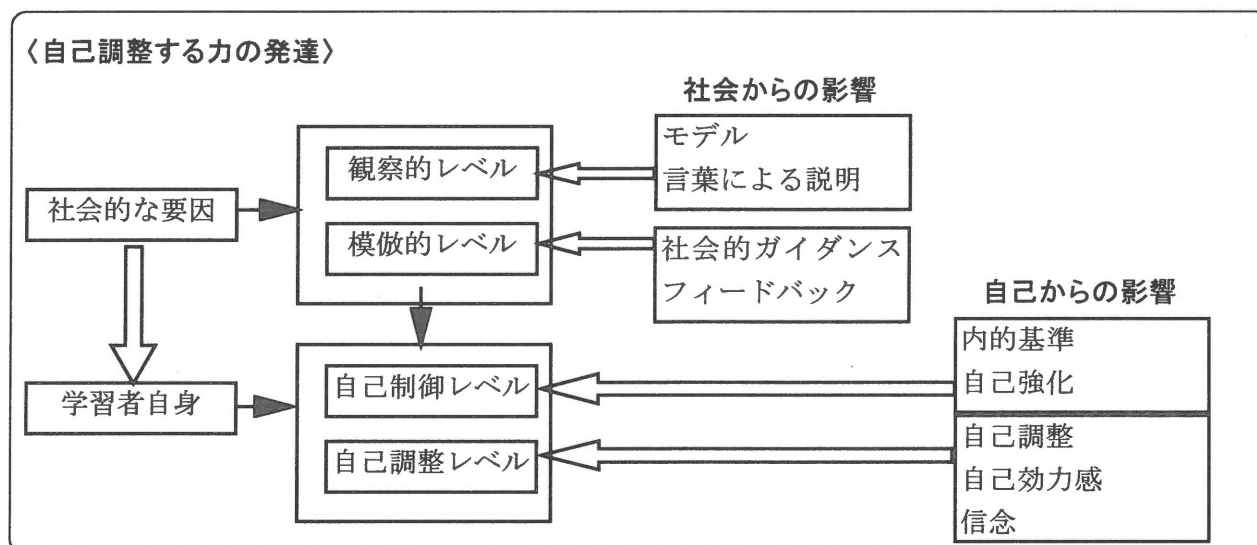
そして、このことを学習評価の研究にあててみると、評価は学習過程における「自己調整」を図る

過程としてとらえることができる。すなわち、結果主義の評価ではなく、学習の過程における「過程主義」に立つ評価であり、このことを自己効力感を高める「自己調整」の過程としてとらえたい。

さて、この「自己調整」についてであるが、「自己調整」とは、目標到達を目指し、思考や感情、方略行動を自らが引き起こし、自己の内面を組織的、計画的に機能させていくことを指している。そして、自己調整は、下図に示すとおり、「予見の段階」「遂行・コントロールの段階」「自己省察の段階」の3段階の循環的プロセスにより行われる。

予見の段階では、課題の認識、目標設立などがあり、遂行・コントロールの段階では、目標達成に向けての方策・実行、方策の修正などがあり、その間、メタ認知的なモニタリングと制御があり、自己省察の段階へと進み、循環されていく。

そして、「自己調整」の過程は、再構成の学習の過程でいえば、「計画」「遂行・意志的制御」「自己省察」であるが、「自己評価」の過程でもある。自己評価は、自己観察、自己反応、自己判断の3つの相互作用で行われる。自己観察と自己反応は、自己評価を促すものであり、自己判断は、目標と観察した自己の到達レベルとを比較することである。これらの「自己調整」する力の発達を次に図示しておく。



なお、ここでは、「自己効力感」について述べておく。自己効力感とは、一定レベルの行動を遂行したり、獲得したりする能力に関する信念である。それは、人がある事態に対処する際、それをどの程度効果的に処理できると考えているかという認知を重視し、一定の結果へ導く行動を自らやれるという期待を抱く自覚を生じる自信のようなものをさす。

(2) 自己調整の方略

自己調整は、教室において様々なことを学ばなければならないが、それらはいくつの特徴を共有している。

① 方略の特徴

- ア 方略は、特定の目標を達成するための意図的行為である。
- イ 方略は、ルールに機械的に従ったりするものではなく、個人によって導入・生成される。
- ウ 方略は、選択的かつ柔軟に実行され、認知的なスキルと動機づけに影響を受ける。
- エ 方略は、社会的に支持される問題解決のコツである。
- オ 方略は、重要な「トラブルシューティング」であり、意識的に適用され、共有される。

② 「自己調整」の過程を取り入れた学習の実施にあたって

ア 教師による方略の説明とモデリング

単に知識を構成する出発点の役割をもち、教師による方略使用のモデリングの内容は、方略を構成的に適用することになる。「モデリング」とは、象徴的な人物やキャラクターがモデルとなり、モデルを観察することにより、感情、行動の変化のことをいう。

イ メタ認知的方略

思考や表現などの認知過程を調整する効果的な学習を促すことであり、学習の計画を立て（プランニング）、学習の進み具合をモニターし（自己モニタリング）、その結果を自己評価する自己調整による学習方策である。自己モニタリングとは、一定の学習手順によって、自己の活動をチェックしていき、自己のアイディアをとりだしておく。

ウ 「自己観察」について

行動は、量、質、独創性といったことで評価される。自己観察は、情動的機能と動機づけの機能をもつ。特に、自己観察は、行動変容を動機づける機能をもっている。自分の行為を記録することで、行動が明らかになり、どこに問題があるか知ることになる。

③ 自己評価

「自ら学び自ら考える力」を育むために、子ども自身による自己評価を取り入れることは、まず、目標に向かって、自らの学習を自ら計画し、学習活動をモニターし、うまく進むように修正や方向付けを行い、学習の成果をふまえて、次の学習へとつないで、自己調整が成立する上で、自己評価は欠かすことのできない重要な役割を果たしている。

ア 学習者が目標を追求する際に必要なこと

大切なことは、学習者が、目標の達成に向かって高まっていると思えることである。明確な基準があれば、課題の進捗を自己評価することが可能である。しかし、多くの課題は、基準が明確でない場合、進捗がゆっくりしている場合など、自己評価が難しい。進捗を知らせ、フィードバックする自己評価ができれば、自己効力感や動機づけを高めることができる。

イ 自己内省過程

自己内省過程には、3つある。自己評価は、自己内省過程の1つである。

- 自己モニターした情報を何らかの基準と比べて自己評価し、よければ先行しようとする。
- 自己評価で、不出来な遂行結果であれば、能力が不十分か、努力が不足しているかのせいにする自己評価となる。
- 不出来な結果をプラスの自己反応にする方略を工夫し、自己効力感を高める自己評価とする。その場合、進捗の状態、自己評価に伴い「適切な自己基準」を設けることも考えられる。こうして、自己効力感を高め、次なる進捗につながっていく。

ウ 自己評価の基準

自己評価とは、自己の行動を基準と比較することである。この基準は、教師、子どもあるいは両者の合意の下で設定されたもので、その要素は次の通りである。

- 自己モニタリングの正確さ
- 遂行の向上度（どれだけ伸びたか）

④ 自己評価で大切にしたいこと

- 認知面と情意面が一体となった自己評価が効果的である。
- 自己の語り、日記、ポートフォリオなどが動的資質を繰り入れた自己内省の練習に役立つ。また、振り返りシートも役立つ。
- 自己評価には、認知的自己評価と情意的自己評価があり、子どもが自ら知識や技能を身に付けたり、獲得した知識や技能を積極的に生かすには、「関心・意欲・態度」のような情意面が基盤として育つことが大切である。
- 自己評価は、自分自身の学習過程について意識化し自己強化することを促し、自己調整を図っていく。

(3)「自己調整」の過程を社会科ノートに

① 小単元の単元構成(学習活動)と評価規準

評価規準については、平成22年5月に文部科学省から「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」が出され、それを受けて、平成22年11月に国立教育政策研究所より評価規準の作成のための参考資料が示された。

それらを受け、それぞれの単元において、観点別学習状況の評価に係る最適の時期や方法を観点ごとに整理することが重要である。これにより、評価すべき点を見落としていないかを確認するだけでなく、必要以上に評価機会を設けることで評価資料の収集・分析に多大な時間を要するような事態を防ぐことができ、各学校において効果的・効率的な学習評価を行うことにつながると考えられる。

② 学習活動と評価基準(ルーブリック)

また、必要に応じて単元の中での学習活動に即した評価規準を設定するとともに、それらをどのような評価方法により評価するのかを具体的に示すことが必要になってくる。この時に必要になってくるのが評価基準（ルーブリック）である。

③ 社会科ノートに評価(自己調整)

自己調整を図っていくためには、自己評価を単元を通して行っていく必要がある。子どもたちが日常的に使っているノートで自己評価ができるよう、下の図のような評価カードの開発を行う。

自己評価で「自己調整」を図る（高学年用）（例）

自己調整の過程	わたしの「すてき」カード			よくできた ◎	だいたいできた ○	もっとがんばる △
予見の段階	①目標設定	学習のめあてをもてた				
	②方略の計画	問題を解決する仕方の見通しをもてた				
	③興味	楽しく喜びをもって取り組めた				
	④自己効力感	自分のもっている力でやってのけられた				
	※各校でのめあて・観点					
	※コメント記入欄					
遂行・コントロールの段階	①注意の焦点化	めあてに向かって集中できた				
	②自己教示	自分でよい資料を選ぶことができた				
	③自己モニタリング	自分の思いや考え方をノートに表せた				
	④自己効力感	自分で考えたことがうまく進んでいる				
自己省察の段階	①自己評価	自分の考えを表し、主張できた				
	②協働	仲間とのかかわりが深まった				
	③創意	自分らしい課題を見つけ、調べられた				
	④自己効力感	まとめたことに満足できた				

【評価規準を単元構成に位置付けた実践事例】

第5学年 小単元名「くらしを変える情報ネットワークの秘密」

1 評価規準

(表 記： 関－①， 思－①， 技－①， 知－①)

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用・技能	社会的事象についての知識・理解
① 情報化した社会の様子に関心をもち、意欲的に調べている。 ② 社会の情報化の進展に関心をもち、情報を有効に活用しようとしている。	① 情報化した社会の様子について学習問題や予想、学習計画を考え、記述している。 ② 調べたことを相互に関連づけたら、情報の活用の仕方と瀬戸内国際芸術祭の入場者数の変化とを関連づけて考え、情報活用の方法について自分なりに根拠を挙げて説明している。	① 資料やインターネットを活用したり、聞き取り調査を行ったりして、情報化した社会の様子について必要な情報を集め、読み取っている。 ② 調べたことを整理して、図表や作品などにまとめている。	① 情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めている取組の様子を理解している。 ② 情報化の進展は、国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを理解している。

2 単元構成 (全8時間)

第1次

「情報ネットワーク」について教科書を概観し、学習問題を設定することができる。 (2時間)

- ◎ 教科書を概観し、情報ネットワークが生活や医療、防災、福祉、教育など様々な場面で使われていることをつかむ。
- ◎ 学校の PTA 携帯連絡網を例にそのしくみについて調べ、模式図に表す。
- ◎ 自分たちで情報を生かし、香川のよさを情報発信する計画を立てる。
- 学校の PTA 携帯連絡網は、緊急時の連絡手段として日常的に使用されている。ネットワークの特性として、即時性、同時性などが挙げられる。
- 瀬戸内国際芸術祭には、多くの県外の方が瀬戸内海の島々に来てくれた。その成功は、情報ネットワークの力だとも言われている。自分たちも、もっと香川の誇る瀬戸内のよさを積極的に発信したい。

発言の内容や話し合いの様子、ノートの記述から、「芸術祭が成功に終わったのはどうしてか調べようという意欲をもつことができたか」「自分なりに学習問題をつくり、予想を立てることができたか」を評価する。

【関－①】【思－①】

パフォーマンス課題

瀬戸内国際芸術祭に大勢の観光客が訪れたのはどうしてか調べ、それをもとにして、瀬戸内のよさを積極的に情報発信するホームページをつくろう。

第2次

様々な情報ネットワークについて調べ、情報ネットワークの特性について理解することができる。 (4時間)

- ◎ 「生活、医療、防災、福祉、教育の事例として、それぞれ瀬戸内国際芸術祭におけるインターネットの利用、医療ネットワーク、防災ネットワーク、情報通信ケーブルでの在宅見守りシステム、図書館検索システムについて調べ、ネットワークを模式図にまとめる。
- ◎ お互いのネットワーク図を交流し、それぞれの特色を明らかにする。
- 情報ネットワークは、それぞれの用途に応じて、ネットワークの特性を生かして活用されている。
- 瀬戸内国際芸術祭は、当初の予想の3倍以上にもなるおよそ93万人の人々が瀬戸内の島々を訪れた。これは、情報ネットワークの力ともいわれている。

ノートの記述から、「調べたことを整理して、情報ネットワークのしくみを図にまとめることができたか」「情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めていることを理解できたか」を評価する。【技－②】【知－①】

第3次

瀬戸内国際芸術祭が成功した要因を分析して調べ、自分なりに根拠をもって説明することができる。 (2時間)

- ◎ 瀬戸内国際芸術祭が成功した要因について考える。
- 瀬戸内国際芸術祭が成功した要因の一つには、情報ネットワークの大きな力がある。
- 新聞やテレビ・ラジオなどのメディアも大きな役割を果たした。
- 口コミなどで訪れるお客さんも多い。また、リピーターが多いのも特徴である。
- 情報ネットワークの力だけでなく、島そのものや芸術に魅力があったことも成功の要因である。

発言の内容や思考図から、「芸術祭に多くの人々が訪れた理由を、これまで調べてきたことを相互に関連づけ、自分なりに根拠をもって説明できたか。」を評価する。

【関－②】【思－②】

- 放送や新聞などの情報産業が、国民に様々な情報を提供し、国民の多くがそれらを多方面で利用している。
- 情報ネットワークの働きが、公共サービスの利用のために、大いに活用されている。
- 情報化の進展が国民生活の向上や産業の発展に大きな影響を及ぼしており、情報の有効な活用が今後の社会にとって重要である。

〈自己評価カードを使用した具体例〉

① 単元「くらしを変える情報ネットワークの秘密」の評価規準

社会的現象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	観察・資料活用技能	社会的現象についての知識・理解
① 情報化した社会の様子に関心をもち、意欲的に調べている。 ② 社会の情報化の進展に関心をもち、情報を有効に活用しようとしている。	① 情報化した社会の様子について学習問題や予想、学習計画を考え、記述している。 ② 調べたことを相互に関連づけたり、情報の活用の仕方と芸術祭の入場者数の変化とを関連づけたりして考え、情報活用の方法について自分なりに根拠を挙げて説明している。	① 資料やインターネットを活用したり、聞き取り調査を行ったりして、情報化した社会の様子について必要な情報を集め、読み取っている。 ② 調べたことを整理して、図表や作品などにまとめている。	① 情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めている取組の様子を理解している。 ② 情報化の進展は、国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを理解している。

② 「再構成の学習」の過程における自己調整による自己評価

	①予見の段階 (問題づくり)	②遂行・意志的制御の段階 (課題追究)	③自己省察の段階 (論述)																								
社会科ノート	学習活動 ◎ 教科書から、情報ネットワークが生活や医療など様々な場面で使われていることをつかみ、学習計画を立てる。 【関一①】 ◎ PTA 携帯連絡網から、ネットワークの特性をつかむ。 子どもの自己評価	◎ 教科書の複数の事例について、それぞれのネットワークの特性を模式図にまとめる。 【技一②】 防災のためのネットワーク 子どもの自己評価	◎ 瀬戸内国際芸術祭が成功した要因を情報ネットワークの点から考える。 【思一②】 子どもの自己評価																								
評価基準 (ルーブリック)	<table><tr><td>3</td><td>瀬戸内国際芸術祭に多くの人々が訪れた理由を情報ネットワークの視点からつかもうというめあてをもち、自分から学習計画を立て、話し合いに進んで参加できている。</td></tr><tr><td>2</td><td>学習のめあてはもっているが、計画が部分的にしか立てることができず、話し合いへの参加も十分ではない。</td></tr><tr><td>1</td><td>学習のめあてがしっかりつかめておらず、学習計画を立てることができない。話し合いにも参加することが難しい。</td></tr></table>	3	瀬戸内国際芸術祭に多くの人々が訪れた理由を情報ネットワークの視点からつかもうというめあてをもち、自分から学習計画を立て、話し合いに進んで参加できている。	2	学習のめあてはもっているが、計画が部分的にしか立てることができず、話し合いへの参加も十分ではない。	1	学習のめあてがしっかりつかめておらず、学習計画を立てることができない。話し合いにも参加することが難しい。	<table><tr><td>3</td><td>教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめ、その図にあった説明文を書くことができている。</td></tr><tr><td>2</td><td>教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめているが、文章によって説明するのが難しい。または、いくつかの事例については、ネットワーク図の特性がはっきりしない。</td></tr><tr><td>1</td><td>教科書の事例を理解することが難しく、ネットワーク図を書くことが難しい。</td></tr></table>	3	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめ、その図にあった説明文を書くことができている。	2	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめているが、文章によって説明するのが難しい。または、いくつかの事例については、ネットワーク図の特性がはっきりしない。	1	教科書の事例を理解することが難しく、ネットワーク図を書くことが難しい。	<table><tr><td>3</td><td>手がかりとなる基本的なデータに合わせて、学んできたそれぞれのメディアの特質を考えて、いろいろな組み合わせを考えながら、自分の論理を作り上げることができている。</td></tr><tr><td>2</td><td>手がかりとなる基本的なデータに合わせてはしているが、部分的にしか合っていない、全体を通してみると、つながりが不十分である。</td></tr><tr><td>1</td><td>手がかりとなる基本的なデータの読み取りが不十分のため、データに合わせて理由を考えようとする意識が薄い。自分の思い込みで論理を展開している。</td></tr></table>	3	手がかりとなる基本的なデータに合わせて、学んできたそれぞれのメディアの特質を考えて、いろいろな組み合わせを考えながら、自分の論理を作り上げることができている。	2	手がかりとなる基本的なデータに合わせてはしているが、部分的にしか合っていない、全体を通してみると、つながりが不十分である。	1	手がかりとなる基本的なデータの読み取りが不十分のため、データに合わせて理由を考えようとする意識が薄い。自分の思い込みで論理を展開している。						
3	瀬戸内国際芸術祭に多くの人々が訪れた理由を情報ネットワークの視点からつかもうというめあてをもち、自分から学習計画を立て、話し合いに進んで参加できている。																										
2	学習のめあてはもっているが、計画が部分的にしか立てることができず、話し合いへの参加も十分ではない。																										
1	学習のめあてがしっかりつかめておらず、学習計画を立てることができない。話し合いにも参加することが難しい。																										
3	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめ、その図にあった説明文を書くことができている。																										
2	教科書の1つ1つの事例について、その特性がはっきりするようにネットワーク図にまとめているが、文章によって説明するのが難しい。または、いくつかの事例については、ネットワーク図の特性がはっきりしない。																										
1	教科書の事例を理解することが難しく、ネットワーク図を書くことが難しい。																										
3	手がかりとなる基本的なデータに合わせて、学んできたそれぞれのメディアの特質を考えて、いろいろな組み合わせを考えながら、自分の論理を作り上げることができている。																										
2	手がかりとなる基本的なデータに合わせてはしているが、部分的にしか合っていない、全体を通してみると、つながりが不十分である。																										
1	手がかりとなる基本的なデータの読み取りが不十分のため、データに合わせて理由を考えようとする意識が薄い。自分の思い込みで論理を展開している。																										
対応	2：課題解決への見通しについて助言する。 1：学習の方向性について教師とともに考える。	2：教師に説明する体験を通して言語化を図る。 1：場面絵を活用してネットワーク図にまとめる。	2：大きな視点で考えてみるよう助言する。 1：教師に説明させることにより、理解を深める。																								
自己評価	<table><tr><td>学習のめあてをもてた</td><td>◎</td></tr><tr><td>問題を解決する仕方の見通しをもてた</td><td>△</td></tr><tr><td>楽しく喜びをもって取り組めた</td><td>○</td></tr><tr><td>自分のもっている力でやってのけられた</td><td>○</td></tr></table>	学習のめあてをもてた	◎	問題を解決する仕方の見通しをもてた	△	楽しく喜びをもって取り組めた	○	自分のもっている力でやってのけられた	○	<table><tr><td>めあてに向かって集中できた</td><td>◎</td></tr><tr><td>自分でよい資料を選ぶことができた</td><td>◎</td></tr><tr><td>自分の思いや考え方をノートに表せた</td><td>○</td></tr><tr><td>自分で考えたことがうまく進んでいる</td><td>△</td></tr></table>	めあてに向かって集中できた	◎	自分でよい資料を選ぶことができた	◎	自分の思いや考え方をノートに表せた	○	自分で考えたことがうまく進んでいる	△	<table><tr><td>自分の考えを表し、主張できた</td><td>△</td></tr><tr><td>仲間とのかかわりが深まった</td><td>◎</td></tr><tr><td>自分らしい課題を見つけ、調べられた</td><td>○</td></tr><tr><td>まとめたことに満足できた</td><td>○</td></tr></table>	自分の考えを表し、主張できた	△	仲間とのかかわりが深まった	◎	自分らしい課題を見つけ、調べられた	○	まとめたことに満足できた	○
学習のめあてをもてた	◎																										
問題を解決する仕方の見通しをもてた	△																										
楽しく喜びをもって取り組めた	○																										
自分のもっている力でやってのけられた	○																										
めあてに向かって集中できた	◎																										
自分でよい資料を選ぶことができた	◎																										
自分の思いや考え方をノートに表せた	○																										
自分で考えたことがうまく進んでいる	△																										
自分の考えを表し、主張できた	△																										
仲間とのかかわりが深まった	◎																										
自分らしい課題を見つけ、調べられた	○																										
まとめたことに満足できた	○																										
対応	△に対して 教師とともに解決の手順について考える。	△に対して 何がうまくいっていないのか教師とともに考える。	△に対して グループなど小集団で発表させ、成功体験を積ませる。																								

4 学校評価につなぐ学習評価

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」においては、「各学校における学習評価は、学習指導の改善や学校における教育課程全体の改善に向けた取組と効果的に結び付け、学習指導に係る PDCA サイクルの中で適切に実施されることが重要である」と述べられている。

報告において PDCA サイクルが強調された背景には、学習評価において妥当性・信頼性を確保するという課題、さらには教師の負担感の問題が指摘されている現状がある。では、どのように取り組めばよいのだろうか。次に例を示す。

Plan の段階	1年後に具体的にどのような資料によって教育課程改善の成果を評価するのか計画する。「思考力・判断力・表現力」が課題なのであれば、それを発揮させるような課題(パフォーマンス課題)を具体的に計画しておく。できれば、事前に児童の反応を想定したルーブリックを作成しておけば、指導に生かすことができる。
Do の段階	教育活動を実施しつつ、成果を示す資料を収集しておく。授業の際、児童の反応を想定したルーブリックに基づき、子どもの反応を見取ることで、指導に生かすことができる。
Check の段階	どの程度のパフォーマンスが行われていれば、満足できるのかを示すルーブリック(評価指標)づくりに協同で取り組むことが有効である。このことにより、職員間で付けたい力が共通理解され、評価の妥当性・信頼性が高まる。 ルーブリックを児童にも自己評価の指針として示すことで、学習を改善することかも期待できる。
Action の段階	Check の段階で出された知見を生かしつつ、さらなる指導の充実や指導計画の改善を図る。

以上のような過程をふむことによって、児童の学習評価は、そのまま学校における教育活動全体の改善につながる学校評価の枠組みの中核に位置付くのである。

Ⅳ 研究主題を支える基本資料

(1) 研究大会「社会科をひらくカリキュラム論」資料

研究主題設定の理由

「社会科をひらく」カリキュラムによる研究を基盤にして

今起きている環境問題一つをとっても、ある自然現象として現れているもののなかには、社会科学的な側面からとらえることも必要になっていることは明らかである。また、その逆も言えるのではないだろうか。

つまり、今日ほど複雑化した社会構造の中では、一人ひとりの人間が生きるという現実においては、諸科学の分化というよりはむしろ、諸科学の総合を含まなければならないということである。これは、小学校社会科が総合社会科としての性格を有していることと価値を同じくする点である。

こうした点から、社会科の内容を考える際には「社会科をひらく」という視点が大切になってくる。

従来までのように3年生の「わたしのまち、みんなのまち」は主として地理的内容から、4年生の「郷土の開発」は歴史的内容から迫る等といった単元の特色に応じて地理的内容、歴史的内容、公民的内容を分けてそれぞれの内容から迫っていくという領域別学習からの脱却を図りたい。

そして、真に実社会、実生活に生きて働く資質・能力を育成するためにも、社会諸科学（地理学、歴史学、政治学、経済学、社会学等）を相互に横断した（ひらく）内容から迫るだけでなく、人文科学、自然科学等、他科学の研究成果も同時に取り入れる（ひらく）ことによって、いわば社会事象を総合的な側面から考察できるように「ひらかれた社会科学習」を創造していくこととする。

こうした基本的な考え方の上に立って、年間指導計画案（試案）の作成を行い、子どもたち一人一人の学力向上を目指した「社会科経営の構想」を創っているところである。

また、これまで学校と家庭の連携の要となる「社会科ノート」を通じて、「見える学力」である知識・理解のみを重視した研究だけではなく、「育てたい力（見えにくい学力）」といわれる思考力・判断力、資料活用の技能・表現等も大切にしたい学力向上に向けての取組を行い、学校評価としての説明責任・結果責任にもつながる研究を行っている。さらに、学校週五日制のもと、子どもたちにある程度自由に活動ができる時間的余裕が与えられた中での自己の学びの充実をどう図っていくかが、学習習慣の形成、学習意欲の向上と大きくかかわって問われている。

そこで、家庭学習の充実のための方策、学校と家庭、地域との協働型学習への転換等という視点から、学習指導の工夫・改善を図っている。

今後とも前述した研究の方向を大切にしつつ、1単位時間の授業改善のための研究実践にとどまるのではなく、各学校の学校改善に寄与する香川県小学校社会科経営に向けた研究を進めていきたいと考えている。

(2) 平成21年度「学ぶ意欲を高める学習の工夫」の研究から

〈主張点①〉指導計画に教科書教材・副読本教材の活用を重視して、社会科授業の日常化を図る

社会科学習を意欲をもって学習する、それも日常化していくためには、どの学校もどの子どもも教師も保護者も手元にある「教科書教材」を有効に活用することによって社会科授業の日常化を図っていくことを模索したい。「教材」は、「素材・資料」を学習として意味あるものとして解釈し、値打ちあるものにして活用するものである。これが教師の「教材観」なのである。教科書教材を使って、どう現象を見取り、どう考え、どのような意味としてとらえ、そして、自分の考えを表現するかが教材を値打ちあるものにできるのである。このことを「教材の構造化」としてとらえていきたい。

この「教材の構造化」を2つの点から考えたい。

1つは、教科書教材の「基礎・基本の事項と内容」の構造化である。教科書教材を①基礎・基本の内容は何か②それを支える基礎・基本の事項は何かで分析し、関係づけ、構造づけること「知識の構造」というものである。

2つは、教科書教材を学ぶ意欲づくりの「何を」と「どのように」から、学びの内容と方法によって構造づけるものである。これは、「思考の構造」と言えるものである。個に応じた見つけ、考え、表す喜びから真の分かる喜びを味わうことのできる構造づけを問いたいと考えている。

そして、香社研「社会科をひらくカリキュラム」は、香川県下各校が作成する社会科指導計画の基盤となるものである。実際の授業にあたっては、地域や学校や子どもの実態に応じて、指導計画を改善・作成しなければならない。「学ぶ意欲」を高めるには、まず、指導計画の改善が強く求められる。

現在、教育現場では、どの教科等の授業においても教科書等を使った一斉授業が行われがちではないだろうか。中には、教科書をなぞるような授業、教師用指導書による単元計画・学習計画による授業でよしとしていることもあるのではないだろうか。そのような場合、教師もつまらない思いながら授業をするようになる。これでは、学習意欲は決して起こらない。学ぶ意欲を高めるには、まず教師が「これはおもしろい。」「日常生活や社会とつながり、子どもの将来の夢や職業にもつながっている。」「知的好奇心も効力感がもてる」と感じられるような『教材の値打ち』が重要な鍵をもつ。ネタ的な教材を教師が与えるのでは、その一時の意欲づくりにしかならない。

教師の意識が変わるきっかけは、授業改善によって子どもの反応が大きく変わる瞬間である。これはおそらくどの教師にも共通する内発的なきっかけである。その点でカリキュラムマネジメントは、「論より証拠」を求めている。

る。その証拠では、授業改善の効果を示すことが必要である。

それは、教員がチームで授業を起点にカリキュラムを改善する試みである。授業技術の改善のみならず、単元や年間指導計画の改善も視野に入れる必要がある。

〈主張点②〉「学ぶ意欲」を高めるとは～「子ども主義」に立つことである～

子どもは、対象に思いや願いをもつことができれば、自ずと意欲が高まり、自ら進んで活動したり、活動そのものに喜びを感じたりして、主体的にねばり強く活動する。それは、何かやりがいのあることを成し遂げたいという欲求、達成動機があるからである。「動機づけ」とは、何らかの行動を引き起こし、ある方向に向け、それを持続させる過程と定義されている。また、「達成動機」とは、活動の結果、成功や失敗として表れるような場面において、できるだけ高いレベルでものごとを成し遂げようとする動機で、いわゆる「やる気」である。そして、達成動機が高い子どもは失敗を恐れず成功を求め、自分の能力に適した少し難しい課題に挑戦する。一方、達成動機の低い子どもは、失敗を避けようとする気持ちが高く、確実に成功する課題か、ほとんど成功の見込みがない課題を選ぶとされている。

さて、「動機づけ」には、外発的動機づけと内発的動機づけがあるとされている。外発的動機づけは、何か物質的な賞罰とか賞賛・叱責における動機づけであり、内発的動機づけは、ある活動をすること自体を自己目的的に求める欲求による動機づけである。そして、外発的動機づけと内発的動機づけについては、内発的動機づけを重視するのであるが、この2つは対立的に捉えるのではなく、連続的に移行すると考えたり、対象への働きかけのちがいでによって捉え方を工夫して生かすというカウンセリング的な考えを取り入れたりすることが望まれる。

内発的動機づけの柱は、知的好奇心である。「知的好奇心」には、拡散的好奇心と特殊的好奇心がある。拡散的好奇心は、多様な幅広い情報に方向性をもたずに働きかけ、興味・関心のある情報に知的に好奇心をもつものであり、特殊的好奇心は、集中的に事象を追求する好奇心である。拡散的好奇心は創造的思考力を、特殊的好奇心が論理的な好奇心を育てるものになるものと言える。

ところで、現実の学級では、外発的動機づけに片寄ったり、外発的動機づけも内発的動機づけももたないほどに、学ぶ意欲を失いかけている子どもたちがいるのではないだろうか。いくら、教師が教材の価値を研究して生かそうとしても、その働きかけに応じようとしない子どもが何人かいる傾向になってはいないだろうか。いったい、何が子どもたちの学ぶ意欲を失わせているのか課題なのである。おそらく、個々に応じた基礎学力が身に付く学習でなかったり、学習習慣が形成されていなかったり、心身の健康上の問題があったりなど様々な要因によるものであろう。

しかし、多くの場合、自己効力感、自尊感情が弱くなっていることが大きいのではないだろうか。自分の能力に対する自信やよさをもつことが失われつつあるからであろう。「自己効力感」は、効力期待から効力期待結果によって育てられる。効力期待は、こんな活動や練習などに取り組むことによって効力結果を期待する感情であり、成果を上げる結果を得よう活動や結果などに取り組もうとする感情である。自己効力感を高め、「わかる」ことが「喜び」に結びつく学習は、そう簡単に実現しない。今までの仕方や考え方で「わかる」のでは、「喜び」にならない。個人差、個性差に応じ、新しい知識なり技能なりを獲得することで「喜び」を得るものでなければならない。そこには、当然目的意識、問題意識をもつ解決・探究の過程が条件となる。

以上、「学ぶ意欲を高める」研究を支える「論」を述べてきた。このことを項目でまとめると、次の通りである。

- 動機づけは外発的動機づけと内発的動機づけがあり、内発的な動機づけを重視する。
- 内発的動機づけの柱は、知的好奇心であり、拡散的好奇心は創造的な思考力を特殊的好奇心は論理的な思考力を育てるものになる。
- 自己効力感とは、やる気をもって喜びに結びつく学びを求めるという効力期待と特殊結果期待により、高められる。

〈主張点③〉「学ぶ意欲」を高める考えを学習過程でとらえる

学ぶ意欲を高める学習の過程は、①問いをもつ、②問いを追求する、③問いを広げるといったそれぞれの段階に分けて考えることができる。

- ① 問いをもつ……子ども自らが生み出すことが大切、追求への意欲を育てることが中心
- ② 問いを追求する……表現活動を中心に据え、学び方を援助、交流の場を工夫することが大切
- ③ 問いを広げる……伸びを認める、社会の一員としての自覚、次の学習への出発点

(3) 平成22年度「学習材の開発により、集団と個のかかわりを深める」の研究から

〈主張点①〉「学習材の開発」～教材を学習材にすることで「思考の構造」を明らかにする～

①教材と学習材

「教材」とは、教科書教材に代表されるように、ある一定の目標を実現するために、基礎・基本の事項や内容を精選して取り入れた素材である。それに対して、「学習材」とは、個に応じた学びができる教材であり、「操作材」ともいえる。

②教材の構造」を明らかにする

教材は、どの教科等も学問的内容を子どもの発達や興味の実態に合うよう科学や芸術・文化から選ばれたもので構成されており、①「共通教材」として教科書・補助教材 ②「自主教材」として子どもが自主的に活用する参考図書、インターネット、その他の資料 ③「教師教材」として教師・専門家などが提供する資料があげられる。ところで、教材は、「素材・資料」ではない。教材は、学習の目標を達成するよう素材・資料を発達に合わせ精選し、価値づけたものである。このことから、①は教育法規に定められた教材であるのに対し、②と③は素材・資料を教材化しなければ「自主教材」「教師教材」にはならない。

③ 教材を学習材として「思考の構造」を明らかにする

学習材の開発に合わせて、「思考の構造」(子どもが思考する道筋)を明らかにすることを研究する。その中心として、「思考図」(シンキングマップ)の活用を置き、研究したことが日常の授業場面で具体的に活用できるよう配慮する。

〈主張点②〉個に応じた学習と集団と個のかかわり

～個に応じた学習を進めるよう「集団の中での個のかかわり」を明らかにする～

①「集団と個のかかわり」とは

集団の中で個と個が引き合う意味を考えてみたい。これには、2つの様相がある。1つは、集団の中での個のかかわりが「個性」を育てることになることである。すなわち、個性を生かし、伸ばすことを、子のよさを伸ばすと考えたい。2つには、集団の中での個のかかわりが、「集団の中での生きる力」を育てることになることである。

②「個に応じた学習」について

ところで、「集団と個のかかわり」を大切にしたい個に応じた学習を進めることは、今求められている学習論の最大の課題なのである。

③「個に応じた学習」を支える言語活動と学習習慣

ア 言語活動の充実

研究テーマにある思考力の育成を考えていく際に、言語活動の充実ということは避けて通れない。なぜなら、今回の指導要領の改訂においては、活用する力(思考力・判断力・表現力等)を育成するために欠かせないものとして、言語活動の充実が図られた経緯があるからである。言語活動を「教科等で学んだ基礎・基本の事項や内容を、実生活や実社会の事象とのかかわりの中で、自分の思いや考えを目的をもった流れとして、論じ、語っていく活動」としてとらえる。

イ 学習習慣の確立

「自主教材」は、子どもたちが自主的に収集した参考図・インターネットなどの資料を教材化したものであるが、子どもたちが資料を収集するのは、主に学校図書であったり、家庭であったりする。そこでは、どうしても子どもによって、調べる資料の収集する意欲をもった学習習慣が大切になってくる。

(4)「思考力の育成」にかかわる国の施策

◎ 中央教育審議会答申(平成20年1月)より抜粋

5. 学習指導要領改訂の基本的な考え方

(4) 思考力・判断力・表現力等の育成

○ 3で示した子どもたちの学力に関する各種の調査の結果は、いずれも知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等に課題があることを示している。今回の改訂においては、各学校で子どもたちの思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむために、まず、各教科の指導の中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、観察・実験やレポートの作成、論述といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させることを重視する必要がある。

(中略)

○ 現在の各教科の内容、PISA調査の読解力や数学的リテラシー、科学的リテラシーの評価の枠組みなどを参考にしつつ、言語に関する専門家などの知見も得て検討した結果、知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、例えば、以下のような学習活動が重要であると考えた。このような活動を各教科において行うことが、思考力・判断力・表現力等の育成にとって不可欠である。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる(例示は省略)

○ これらの学習活動の基盤となるものは、数式などを含む広い意味での言語であり、その中心となるのは国語である。しかし、だからといってすべてが国語科の役割というものではない。それぞれに例示した具体の学習活動から分かるとおり、理科の観察・実験レポートや社会科の社会見学レポートの作成や推敲、発表・討論などすべての教科で取り組まれるべきものであり、そのことによって子どもたちの言語に関する能力は高められ、思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られる。

このため、学習指導要領上、各教科の教育内容として、これらの記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があることを明示すべきと考える。

◎ 学習指導要領解説総則編より抜粋

第1章 総説

2 改訂の基本方針

② 知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること。

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要がある。

このため、各教科において基礎的・基本的な知識・技能の習得を重視するとともに、観察・実験やレポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を充実すること、さらに総合的な学習の時間を中心として行われる、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動の質的な充実を図ることなどにより思考力・判断力・表現力等を育成することとしている。また、これらの学習を通じて、その基盤となるのは言語に関する能力であり、国語科のみならず、各教科等においてその育成を重視している。さらに、学習意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を養うとともに、家庭との連携を図りながら、学習習慣を確立することを重視している。

第3章 教育課程の編成及び実施

第5節 教育課程実施上の配慮事項

2 体験的・問題解決的な学習及び自主的、自発的な学習の促進

(2)各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること。

これからの学校教育においては、変化の激しいこれからの社会を考えたとき、また、生涯にわたる学習の基礎を培うため、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、それらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等の育成を重視した教育を行うことが必要であり、児童がこれらを支える知的好奇心や探究心をもって主体的に学習に取り組む態度を養うことは極めて重要である。このような資質や能力を育成するためには、体験的な学習や基礎的・基本的な知識・技能を活用した問題解決的な学習を充実する必要がある。

◎ 学習指導要領解説社会編より抜粋

第1章 総説

2 社会科改訂の趣旨

また、実際の授業では、問題解決的な学習などを一層充実させることや、観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手し的確に記録する学習、それらを比較・関連付け、総合しながら再構成する学習、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習など言語活動の充実を図ることを求めている。

第2章 社会科の目標及び内容

2 学年の目標

(2) 各学年の目標の系統

③ 能力に関する目標

社会的な思考力や判断力について、第3学年及び第4学年では、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力を、第5学年では、社会的事象の意味について考える力を、第6学年では、社会的事象の意味をより広い視野から考える力を育てるようにすることを求めている。表現力については、いずれの学年においても、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにすることを求めている。

参考文献

- 「授業改革と学力評価」 北尾 倫彦 図書文化社 2008 年
「子どもの思考力」 滝沢武久 岩波書店 1984 年
「考える・まとめる・表現する」 大庭・コティ・さち子 NTT出版 2009 年
「学ぶ意欲の心理学」 市川伸一 PHP新書 2001 年
「学習心理学」 辰野千寿 教育出版 1994 年
「社会科ノート」による思考力の育成 香社研 東洋館出版社 2008 年
「社会認識の系統からみた社会科新単元構成(試案)」 香社研 2008 年
「自己調整学習の理論」 バリー・J・ジーママン、ディル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2006 年
「自己調整学習の実践」 バリー・J・ジーママン、ディル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2007 年
「自己調整学習と動機づけ」 バリー・J・ジーママン、ディル・H・ジャンク編著 塚野州一編訳
北大路書房 2009 年
「自己調整学習の成立過程」 伊藤崇達 北大路書房 2009 年

その他

平成22年度事業報告

1 定例研究集会

○ 6月定例会（丸亀）

- ・ 月 日 6月26日（土）9：30～11：30
- ・ 場 所 丸亀市綾歌町栗熊コミュニティセンター
- ・ テーマ 自分づくりの社会科学習
ー基礎基本の定着と自ら学ぶ問題解決能力の育成を求めてー
- ・ 提案者 岡野 雄太郎（丸・垂水小）
第3学年「学校のまわりの絵地図をつくろう」
- ・ 司会者 馬場 直明（丸・飯野小）
- ・ 指導者 山崎 敏和 先生 森 昭 二 先生

○ 7月定例会（高松西・南）

- ・ 月 日 7月10日（土）9：30～11：30
- ・ 場 所 高松市市民防災センター
- ・ テーマ 『社会科』における思考力の育成を図る
ー子どもの学習意欲を大切にし、読解力と豊かな言語活動の展開による日々の授業実践の充実を目指してー
- ・ 提案者 高松西 姫田 朋樹（亀阜） 轟 秀明（下笠居）
高松南 中尾 美方子（林） 森口 英樹（十河）
第6学年「源頼朝と鎌倉幕府」
- ・ 司会者 大奥 洋介（円座）
- ・ 記録者 藤澤 大地（多肥）
- ・ 指導者 植松 勝 先生 岡本 英孝 先生

○ 9月定例会（三豊・観音寺）

- ・ 月 日 9月25日（土）14：30～
- ・ 場 所 三豊市豊中町芙蓉文化の里館（豊中町図書館）
- ・ テーマ 個が育ち、生きる社会科学習の創造
ー考える力をつけるための社会科学習をめざしてー
- ・ 提案者 出演 大資（観・豊浜小） 藤本 博文（三・本山小）
第4学年「水はどこから」
- ・ 司会者 合田 雅気（観・一ノ谷小）
- ・ 記録者 萬亀 弘吉（三・下高瀬小）
- ・ 指導者 前田 高次 先生 森 昭二 先生

○ 10月定例会（高松東）

- ・ 月 日 10月16日（土）9：30～12：00
- ・ 場 所 古高松コミュニティセンター
- ・ テーマ 『社会科』における思考力の育成を図る
ー子どもの学習意欲を大切にし、読解力と豊かな言語活動の展開による日々の授業実践の充実を目指してー
- ・ 提案者 間嶋 大輔（屋島東小） 真鍋 長嗣（栗林小）
第5学年「自動車をつくる工業」
ー自動車工場と消費者をつなぐ自動車整備工場ー
- ・ 司会者 榎原 一宏（中央小）
- ・ 記録者 篠原 絵里香（栗林小）
- ・ 指導者 関根 建一 先生 小原 敏昭 先生

○ 11月定例会（坂出・綾歌）

- ・ 月 日 11月13日（土）9：00～
- ・ 場 所 綾歌町立羽床小学校
- ・ テーマ 分かる喜びを実感できる社会科学習の展開
ー体験的な学習・問題解決的な学習の充実を通してー
- ・ 提案者 西尾 由加（綾・昭和小） 宮武 克明（綾・宇多津北小）
第6学年「源頼朝と鎌倉幕府～一所懸命 農村に住む武士の暮らし～」
- ・ 司会者 福家 寿夫（坂・東部小）
- ・ 指導者 唐木 裕志 先生 大谷 伸一 先生

2 夏季研修会

- ・ 月 日 7月28日(水)
- ・ 場 所 さぬき市志度音楽ホール
志度社会福祉センター
さぬき市志度構造改善センター
- ・ 内 容 提案発表,「教材の構造」「思考の構造」つくり実践演習分科会,講演
- ・ 提案者 本部提案 :大嶋 和彦(附高小)
さぬき・東かがわ支部提案:永坂 邦彦

分科会Ⅰ：実践提案発表

分科会	単元名	授業提案者	課題提案者
第3学年	工場の仕事 「日本一の手袋のまち・白鳥」	教諭 仲内 ゆかり (東・本町小)	教諭 松村和仁 (東・本町小)
第4学年	水はどこから 「引田を支える水」	教諭 高田 宏隆 (東・引田小)	教諭 沖 肅二 (東・三本松小)
第5学年	米づくりのさかんな庄内平野 「水主米との出会い」	教諭 濱松 春水 (東・誉水小)	教諭 山下 勝正 (東・丹生小)
第6学年	米づくりのむらから古墳のくにへ 「富田茶臼山古墳から学ぶ」	教諭 白澤 一修 (さ・富田小)	教諭 永坂 邦彦 (さ・津田小)

分科会Ⅱ：演習提案発表

学年分科会		単元名	演習推進者	
			提案者	提案協力者
3年		「わたしのまち みんなのまち」	教諭 丸尾 浩一 (坂・川津小)	教諭 宮武 克明 (宇・宇多津北小)
4年	I	「水はどこから」	教諭 靄羽 美緒 (高・多肥小)	教諭 白川 由美 (高・多肥小)
	II	「水はどこから」	教諭 藤本 博文 (三・本山小)	教諭 安藤 通 (観・豊浜小)
5年	I	「日本の米づくり」	教諭 北分 英樹 (丸・城東小)	教諭 馬場直明 (丸・飯野小)
	II	「自動車をつくる工業」	教諭 真鍋 長嗣 (高・栗林小)	教諭 岡本 竜也 (高・木太南小)
6年	I	「源頼朝と鎌倉幕府」	教諭 姫田 朋樹 (高・亀阜小)	教諭 轟秀明 (高・下笠居小)
	II	「武家政権成立」 ～武士の悲願を叶えた源頼朝～	教諭 渡部 岳史 (琴・琴平小)	教諭 佐柳 仁 (琴・琴平小)

- ・ 講師 文部科学省 初等中等教育局教育課程課 教科調査官
国立教育政策研究所 教育課程研究センター 教育課程調査官 澤井 陽介 先生
「思考力を育てる問題解決的な学習の充実」

「研究フォーラム2010」報告

例年、1年のまとめの会として位置付けられていた香社研「研究委員会」は、より広くより多くの先生方の学びの場となるようにと、昨年度から香社研「研究フォーラム」という名前に変え、パネル発表という形で実践交流を行っています。本年度は、さらに新たな試みとして國學院大學教授安野功氏（前文部科学省初等中等教育局教科調査官）をお招きし、ご講演いただきました。

1 目的

- ・ 各郡市の今年度の実践を交流したり、講師の方々の講評、講演を通して、研究を深化し、来年度の研究の方向性を探る。
- ・ 香社研の研究を広く県内外や他教科の先生方にも広める。

2 日時 平成23年2月19日（土）13:00～16:50

3 場所 香川大学教育学部附属坂出小学校 体育館

4 日程

12:30～13:00 受付（発表準備）

◆ 開会 13:00～13:05

会長挨拶（佐藤 正文 校長先生）

◆ 実践交流（パネル発表） 13:05～14:25

13:05～13:10 準備・移動

13:10～13:35 第1ラウンド（さ・東，高松東，坂・綾）

13:35～14:00 第2ラウンド（小豆，高松南，丸亀）

14:00～14:25 第3ラウンド（高松西，三・観）

◆ 本部提案「来年度の方向」 14:30～15:00

研究部長 香川大学教育学部附属高松小学校 大嶋 和彦 先生

◆ 講評 15:05～15:15

香川県教育委員会 義務教育課 主任指導主事 大谷 伸一 先生

◆ 講演 15:15～16:45

「評価から探るこれからの社会科授業」－客観性から妥当性へ－

國學院大學教授 安野 功先生

◆ 閉会 16:45～16:50

副会長挨拶（岡根淳二校長先生）

5 活動の概要

(1) 実践交流



各郡市社研において、本年度実践された成果を持ち寄り、パネル発表という形で交流を行いました。

まず、各郡市社研の基本的な考え方が提案され、次に、資料を使って実践が報告されました。そして、参会者から質問や意見が出され、熱心な討議が行われました。

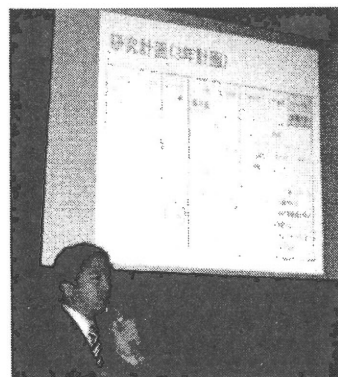
実際に授業で使った子どものノートを囲んでそれを基に話し合いが進んだり、開発した教材・教具を実際に使って模擬授業が行われたり、と趣向を凝らした報告が次々に行われました。参会された先生方からは、「非常に具体的で勉強になる。」「明日からの実践に即、生かせる提案だ。」という声が聞かれ、大変好評でした。これらの郡市の提案をいかに来年度研究に反映させるかが今後の課題となります。



(2) 本部提案・講評

研究部長大嶋先生から、来年度研究の方向について提案がありました。来年度は、研究3年計画の3年目になります。視点Ⅰ「動機付け」、視点Ⅱ「思考力」研究の成果をふまえ、視点Ⅲ「評価の観点を生かした授業改善」へと歩を進めます。

講評をいただいた香川県教育委員会義務教育課主任指導主事大谷伸一先生からは、フォーラムの試みを価値付けしていただくと共に、発達段階に応じた思考とその評価について貴重なご示唆をいただきました。

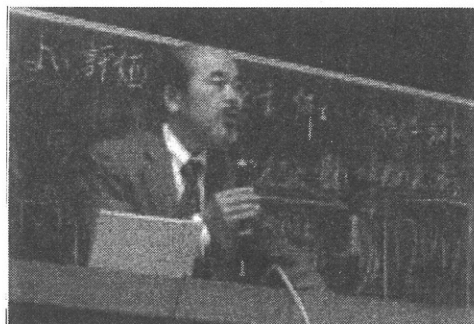


(3) 講演

國學院大學教授安野功先生から「評価から探るこれからの社会科授業 ―客観性から妥当性へ―」と題してご講演をいただきました。

「よい評価問題は、授業が見えるものでなければならない」「客観性から妥当性へとシフトした背景には負担軽減がある」「思考の評価は、表現に依るが、思考の過程における表現か、思考の結果としての表現かを見極めること」

など、具体的な事例を基に分かりやすくお話いただきました。来年度研究へとつながる貴重なご示唆をいただきました。



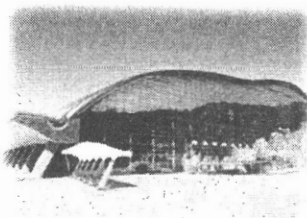
平成23年度 香社研フィールドワークのご案内

平成22年度のフィールドワークでは、旅行会社のプランにはない、香社研だけのオリジナルツアーを企画しました。新しい教科書に掲載されている事例地を中心に巡る1泊2日のフィールドワークを通して、歴史、伝統、文化や、人々の温かい心に触れることができました。参加人数も、38名に達し、多くの会員様から御好評をいただきました。23年度も、香社研ならではのプランを立て、香社研会員間のネットワークを広げたり、教材への造詣を深めたりしていきたいと思います。香社研の会員でない方の参加も大歓迎です。ぜひ、御一緒に生きた教材研究をしませんか。

- 目 的：
- ① 新教科書に掲載されている地域を巡り、教材研究を深める。
 - ② 教員同士の親睦を深め、ネットワークを広げていく。
 - ③ 教科、世代、男女を問わず参加していただき、香社研の輪を広げていく。



行先予定：九州北部地域



①九州国立博物館

108年ぶり、平成17年に設置された、最も新しい国立博物館。「日本文化の形成をアジア史の視点から見る」というコンセプトで、常時800点以上の文化財が展示されている。6年生の歴史単元の導入として紹介されているこの博物館は、一見の価値あり!!



②板付遺跡

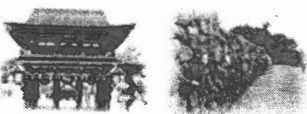
縄文晩期から弥生後期の日本でも最初期の集落遺跡。住居跡・貯蔵穴・井戸などを囲んで117mの環濠が巡り、周囲に水田跡が広がる。弥生館には、多くの発掘資料も展示されている。



③吉野ヶ里遺跡

時代最大規模の環濠集落跡を復元整備した公園。神崎市・吉野ヶ里町にまたがり、多数の竪穴式住居跡や高床式倉庫、甕棺墓（かめかんぼ）等が出土。

④その他にも・・・大宰府天満宮・元寇防塁跡など



梅が枝餅に舌鼓を打ちながら菅原道真公を祀る太宰府天満宮をめぐったり、元寇（弘安の役）で元軍の進入を阻んだ2mもの高さの防塁跡等、見所多数。

日時予定： 平成23年8月20日（土）AM7:00～8月21日PM9:00（日）

日程予定： 1日目 ○香川県→○吉野ヶ里遺跡→○防塁跡→○ホテル

2日目 ○ホテル→○板付遺跡→○太宰府天満宮→○九州国立博物館→○香川県

募集人数： 30名から45名（昨年38名）

交通手段： 貸し切りバス

費用： 1人20,000円（バス代・宿泊費・食事代など含む。当日集金いたします。）

申込方法： 各学校に配布したファックス用紙か、事務局へ直接の申し込み

集合場所等： 詳細については、後日、参加者の皆様に連絡いたします。

平成23年度 本部役員組織

	氏 名	学 校 名
会 長	岡根 淳二	観音寺市立柞田小学校
副会長	徳田 仁司	高松市立国分寺北部小学校
	三井 重彰	さぬき市立造田小学校
	山田 知志	坂出市立坂出小学校
幹 事	池田 孝徳	高松市立植田小学校
	亀井 伸治	高松市立多肥小学校
	藤岡 邦幸	高松市立古高松小学校
	鎌谷 敦之	丸亀市立城北小学校
会 計	石井 昌彦	小豆島町立苗羽小学校
監 査	山下 晃	高松市立浅野小学校

顧問（歴代会長）

岩倉 良行	糸川 達	柳 清茂	池内 博
岡野 啓	亀山 信夫	川田 豊弘	亀井 達男
曾根 照正	中田 清	上川 敦生	丸野 忠義
古市 聖治	大西 孝典	山崎 敏和	植松 勝
高橋 英弐	唐木 裕志	佐藤 正文	

事務局

大嶋 和彦	河田 祥司	黒田 拓志
山内 秀則	藤本 博文	

平成23年度 年間研修計画

月	理事会 総会等	運営部			編集部	情報発信部
		定例研修会 研究フォーラム	夏季研修会 (三・観)	実地研修	社会科の 基礎・テスト 編集委員会	社会科教室 香社研だより
4	29(金) 理事会14:30~ 総会15:30~ 歓送迎会 17:00~ 〈銀星旅館〉			見学地検討 29(金) 10:00~ フィールド ワーク運営 委員会 〈銀星旅館〉	29(金) 12:30~ 第1回 平成24年度1 基礎・テスト 〈銀星旅館〉	
5			21(土) 9:00~ 事前検討会① 〈銀星旅館〉	打ち合わせ 会(随時)	21(土) 13:30~ 第2回 平成24年度1 基礎・テスト 〈銀星旅館〉	
6	10日(金) 全小社理事会 〈東京〉	18日(土) 9:30~ (坂・綾)	25日(土) 9:30~ 事前検討会② 〈附属坂出小〉	参加者募集	18(土) 13:30~ 第3回 平成24年度1 基礎・テスト 〈銀星旅館〉	社会科教室 第154号 (総会特集)
7		2日(土) 9:30~ (高松)	2日(土) 13:30~ 事前検討会③ 〈附属高松小〉 16(土) 10:00~ 製本・発送 〈附属坂出小〉 25(月) 会場準備 13:00~ 〈マリノウェー ブ他〉 26(火) 9:00~ 夏季研修会 (三・観) 〈マリノウェー ブ他〉	追加募集	平成24年度1 基礎・テスト 校正作業 入稿 (事務局)	香社研だより (坂・綾) 夏季研修会要項 (三・観)

8				20日(土) 21日(日) 実地研修 〈福岡・佐賀 方面〉 (予定)		
9		10日(土) 9:30~ (高松)			10(土) 13:30~ 第1回 平成24年度2 基礎・テスト 〈銀星旅館〉	香社研だより (高松) 香社研だより (実地研修報告)
10	27日(木) 28日(金) 全小社全国大会 全小社理事会 〈石川〉	15日(土) 9:30~ (丸亀)			15日(土) 13:30~ 第2回 平成24年度2 基礎・テスト 〈銀星旅館〉	香社研だより (高松)
11		12日(土) 9:30~ (小豆, さ・東) 〈銀星旅館〉			12日(土) 13:30~ 第3回 平成24年度2 基礎・テスト 〈銀星旅館〉	香社研だより (丸亀)
12	3(土) 理事会 16:00~ 年末反省会 17:00~ 〈銀星旅館〉				平成24年度2 基礎・テスト 校正作業 入稿 (事務局)	
1						
2	18日(土) 17:00~ 年度末懇親会 (坂出)	18日(土) 13:00~ 研究フォーラム 〈附属坂出小〉				香社研だより (小豆, さ・東)
3						社会科教室 第155号 (本年度のまとめ)

平成23年度 各都市役員名簿

【高松市社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	山下 晃	校長	高松市立浅野小学校	○
副会長	藤岡 邦幸	校長	高松市立古高松小学校	
副会長	亀井 伸治	校長	高松市立多肥小学校	
副会長	池田 孝徳	校長	高松市立植田小学校	
副会長	徳田 仁司	校長	高松市立国分寺北部小学校	
副会長	森 正彦	校長	三木町立氷上小学校	
庶務	黒川 浩一	教諭	高松市立香南小学校	○
研究部	野土 裕彦	教諭	高松市立三溪小学校	

【高松西社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	徳田 仁司	校長	高松市立国分寺北部小学校	○
庶務	大奥 洋介	教諭	高松市立円座小学校	○
庶務	池田 誠	教諭	高松市立国分寺北部小学校	
研究部	坪井 孝明	教諭	高松市立鶴尾小学校	
研究部	高尾 悠司	教諭	高松市立円座小学校	

【高松東社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	藤岡 邦幸	校長	高松市立古高松小学校	○
庶務	樫原 一宏	教諭	高松市立中央小学校	○
庶務	井上 泉	教諭	高松市立高松第一小学校	
研究部	真鍋 長嗣	教諭	高松市立栗林小学校	
研究部	間島 大輔	教諭	高松市立屋島東小学校	

【高松南社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	亀井 伸治	校長	高松市立多肥小学校	○
副会長	池田 孝徳	校長	高松市立植田小学校	○
副会長	森 正彦	校長	三木町立氷上小学校	
庶務	福家 正人	教諭	高松市立仏生山小学校	○
研究部	白川 由美	教諭	高松市立多肥小学校	
研究部	轟 秀明	教諭	高松市立大野小学校	

【丸亀社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	鎌谷 敦之	校長	丸亀市立城北小学校	○
副会長	田井 敏之	校長	丸亀市立飯野小学校	
副会長	合田 吉宏	教頭	丸亀市立城坤小学校	
副会長	白川 豊浩	教頭	丸亀市立城南小学校	
庶務	多田 明弘	教諭	丸亀市立城西小学校	
研究部	馬場 直明	教諭	丸亀市立飯野小学校	
研究部	平田 啓介	教諭	丸亀市立城西小学校	
研究部	寒川 英樹	教諭	丸亀市立富熊小学校	○

【坂出・綾歌社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	山田 知志	校長	坂出市立坂出小学校	○
副会長	野村 亮子	教頭	坂出市立松山小学校	
副会長	早瀬 良子	教頭	綾川町立昭和小学校	
庶務	福家 寿夫	教諭	坂出市立東部小学校	○
研究部	宮武 克明	教諭	宇多津町立宇多津北小学校	
研究部	西尾 由加	教諭	綾川町立昭和小学校	

【小豆社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	石井 昌彦	校長	小豆島町立苗羽小学校	○
副会長	藤本 修	教頭	小豆島町立安田小学校	
庶務	平林 泰徳	教諭	土庄町立北浦小学校	○
研究部	瀬名 宏樹	教諭	小豆島町立安田小学校	
研究部	塩見 強	教諭	小豆島町立池田小学校	
研究部	田村 一郎	教諭	小豆島町立星城小学校	
研究部	上嶋 光晴	講師	小豆島町立安田小学校	

【さぬき・東かがわ社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	三井 重彰	校長	さぬき市立造田小学校	○
副会長	大高 哲也	教頭	さぬき市立石田小学校	
庶務	白澤 一修	教諭	東かがわ市立三本松小学校	○
研究部	松村 和仁	教諭	東かがわ市立本町小学校	

【三観社研】

役員名	氏名	職名	学校名	香社研理事 (○)
会長	安藤 清和	校長	三豊市立吉津小学校	○
副会長	臼杵 優	教頭	観音寺市立柞田小学校	
庶務	萬亀 弘吉	教諭	三豊市立下高瀬小学校	○
研究部	出濱 大資	教諭	観音寺市立観音寺南小学校	
研究部	黒川 実	教諭	三豊市立大野小学校	

平成23年度 研修会別会員名簿

【高松西社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	大奥 洋介	教諭	高松市立円座小学校学校
定例研修会	蘆原 秀稔	教諭	高松市立国分寺南部小学校
定例研修会	池田 誠	教諭	高松市立国分寺北部小学校
定例研修会	坪井 孝明	教諭	高松市立鶴尾小学校
基礎・テスト編集委員	蘆原 秀稔	教諭	高松市立国分寺南部小学校
基礎・テスト編集委員	高尾 悠司	教諭	高松市立円座小学校
基礎・テスト編集委員	白根 雅史	教諭	高松市立鶴尾小学校
基礎・テスト編集委員	瀧 義幸	教諭	高松市立一宮小学校
基礎・テスト編集委員	坪井 孝明	教諭	高松市立鶴尾小学校
社会科情報発信	坪井 孝明	教諭	高松市立鶴尾小学校
フィールドワーク運営委員	高尾 悠司	教諭	高松市立円座小学校

【高松東社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	桎原 一宏	教諭	高松市立中央小学校
定例研修会	井上 泉	教諭	高松市立高松第一小学校
定例研修会	真鍋 長嗣	教諭	高松市立栗林小学校
定例研修会	間嶋 大輔	教諭	高松市立屋島東小学校
基礎・テスト編集委員	桎原 一宏	教諭	高松市立中央小学校
基礎・テスト編集委員	間嶋 大輔	教諭	高松市立屋島東小学校
基礎・テスト編集委員	真鍋 長嗣	教諭	高松市立栗林小学校
基礎・テスト編集委員	篠原 絵里香	教諭	高松市立栗林小学校
社会科情報発信	桎原 一宏	教諭	高松市立中央小学校
フィールドワーク運営委員	磯崎 由香	教諭	高松市立花園小学校
フィールドワーク運営委員	平井小百合	教諭	高松市立中央小学校

【高松南社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	福家 正人	教諭	高松市立仏生山小学校
定例研修会	藤井 武史	教諭	高松市立香南小学校
定例研修会	樽本 篤史	教諭	三木町立平井小学校
定例研修会	森川 美香	教諭	高松市立大野小学校
定例研修会	宮西 亮輔	教諭	三木町立氷上小学校
基礎・テスト編集委員（教頭先生）	安倍 幸則	教頭	高松市立上西小学校
基礎・テスト編集委員	黒川 浩一	教諭	高松市立香南小学校
基礎・テスト編集委員	森口 英樹	教諭	高松市立十河小学校
基礎・テスト編集委員	白川 由美	教諭	高松市立多肥小学校
基礎・テスト編集委員	靄羽 美緒	教諭	高松市立多肥小学校
社会科情報発信	池田 康輔	教頭	高松市立川東小学校
フィールドワーク運営委員	靄羽 美緒	教諭	高松市立多肥小学校
フィールドワーク運営委員	長井 勝洋	教諭	高松市立川島小学校

【丸亀社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	梅谷 旬	教諭	丸亀市立城坤小学校
定例研修会	山本 奈保子	教諭	丸亀市立城東小学校
定例研修会	秋山 侑大	教諭	丸亀市立城坤小学校
定例研修会	長沼 裕子	教諭	丸亀市立城辰小学校
基礎・テスト編集委員	中西 昇	教諭	丸亀市立城北小学校
基礎・テスト編集委員	多田 明広	教諭	丸亀市立城西小学校
基礎・テスト編集委員	大砂古 佳美	講師	丸亀市立飯山北小学校
基礎・テスト編集委員	吉田 良三	教諭	丸亀市立飯山北小学校
基礎・テスト編集委員	増井 康弘	教諭	丸亀市立城北小学校
社会科情報発信	山本 奈保子	教諭	丸亀市立城東小学校
フィールドワーク運営委員	眞井 孝征	教諭	丸亀市立飯山南小学校

【坂出・綾歌社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	河野 富男	教諭	坂出市立瀬居小学校
定例研修会	福家 寿夫	教諭	坂出市立東部小学校
定例研修会	宮武 克明	教諭	宇多津町立宇多津北小学校
定例研修会	西尾 由加	教諭	綾川町立昭和小学校
基礎・テスト編集委員（教頭先生）	早瀬 良子	教頭	綾川町立昭和小学校
基礎・テスト編集委員	福家 寿夫	教諭	坂出市立東部小学校
基礎・テスト編集委員	宮武 克明	教諭	宇多津町立宇多津北小学校
基礎・テスト編集委員	勝田 健彦	教諭	宇多津町立宇多津小学校
基礎・テスト編集委員	三谷 沙織	教諭	坂出市立坂出小学校
社会科情報発信	山西 由里子	教諭	坂出市立金山小学校
フィールドワーク運営委員	福家 実樹	教諭	綾川町立昭和小学校

【小豆社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	瀬名 宏樹	教諭	小豆島町立安田小学校
定例研修会	塩見 強	教諭	小豆島町立池田小学校
定例研修会	田村 一郎	教諭	小豆島町立星城小学校
定例研修会	上嶋 光晴	教諭	小豆島町立安田小学校
定例研修会	平林 泰徳	教諭	土庄町立北浦小学校
基礎・テスト編集委員	田村 一郎	教諭	小豆島町立星城小学校
基礎・テスト編集委員	黒川 幸宣	教諭	土庄町立湊崎小学校
社会科情報発信	笠井 誉子	教諭	土庄町立湊崎小学校
フィールドワーク運営委員	山下 結花	教諭	土庄町立土庄小学校

【さぬき・東かがわ社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	白澤 一修	教諭	東かがわ市立三本松小学校
定例研修会	仲内 ゆかり	教諭	東かがわ市立本町小学校
定例研修会	山下 博	教諭	さぬき市立石田小学校
定例研修会	松村 和仁	教諭	東かがわ市立本町小学校
定例研修会	柴田 奈緒	教諭	東かがわ市立丹生小学校
定例研修会	和田 千幸	教諭	さぬき市立長尾小学校
定例研修会	久保田 直寛	教諭	さぬき市立志度小学校
基礎・テスト編集委員（教頭先生）	橋本 義人	教頭	東かがわ市立丹生小学校
基礎・テスト編集委員	六車 浩	教諭	東かがわ市立引田小学校
基礎・テスト編集委員	久保田 直寛	教諭	さぬき市立志度小学校
基礎・テスト編集委員	松原 伸二	教諭	さぬき市立造田小学校
社会科情報発信	山下 博	教諭	さぬき市立石田小学校
社会科情報発信	六車 浩	教諭	東かがわ市立引田小学校
フィールドワーク運営委員	近江 麻子	教諭	さぬき市立志度小学校
フィールドワーク運営委員	藤澤 大地	教諭	さぬき市立志度小学校

【三観社研】

研修会名	氏名	職名	学校名
定例研修会	萬亀 弘吉	教諭	三豊市立下高瀬小学校
定例研修会	合田 雅気	教諭	観音寺市立一ノ谷小学校
定例研修会	安藤 通	教諭	観音寺市立豊浜小学校
定例研修会	出演 大資	教諭	観音寺市立観音寺南小学校
定例研修会	黒川 実	教諭	三豊市立大野小学校
定例研修会	村上 輝司	教諭	観音寺市立大野原小学校
定例研修会	岩田 典男	教諭	三豊市立比地小学校
定例研修会	秋元 一秀	教諭	観音寺市立一ノ谷小学校
基礎・テスト編集委員（教頭先生）	臼杵 優	教頭	観音寺市立柞田小
基礎・テスト編集委員	安藤 通	教諭	観音寺市立豊浜小学校
基礎・テスト編集委員	萬亀 弘吉	教諭	三豊市立下高瀬小
基礎・テスト編集委員	岸上 也寸志	教諭	三豊市立詫間小
基礎・テスト編集委員	出演 大資	教諭	観音寺市立観音寺南小学校
基礎・テスト編集委員	大平 晃司	教諭	観音寺市立高室小学校
社会科情報発信	黒川 実	教諭	三豊市立大野小学校
社会科情報発信	出演 大資	教諭	観音寺市立観音寺南小学校

平成23年度 香社研 会員名簿

【高松市社研】

番号	会員氏名	学校名	学年等
1	徳田 仁司	高松市立国分寺北部小学校	校長
2	久保 範高	高松市立国分寺北部小学校	主幹
3	出口 英治	高松市立国分寺北部小学校	特別支援
4	池田 誠	高松市立国分寺北部小学校	5年
5	高吉 直之	高松市立国分寺北部小学校	6年
6	勝浦由梨奈	高松市立国分寺北部小学校	4年
7	高橋 洋子	高松市立新番丁小学校	5年
8	鈴木 貴也	高松市立新番丁小学校	少人数
9	姫田 朋樹	高松市立亀阜小学校	4年
10	坪井 孝明	高松市立鶴尾小学校	3年
11	白根 雅史	高松市立鶴尾小学校	専科
12	網野 未来	高松市立香西小学校	1年
13	大奥 洋介	高松市立円座小学校	4年
14	高尾 悠司	高松市立円座小学校	3年
15	末澤 陽子	高松市立円座小学校	2年
16	田坂 好世	高松市立下笠居小学校	4年
17	萱原 照子	高松市立国分寺南部小学校	3年
18	蘆原 秀稔	高松市立国分寺南部小学校	特別支援
19	瀧 義幸	高松市立一宮小学校	5年
20	小原 敏昭	直島町立直島小学校	教頭
21	稲田 耕一	直島町立直島小学校	特別支援
22	大嶋 和彦	附属高松小学校	6年
23	河田 祥司	附属高松小学校	4年
24	黒田 拓志	附属高松小学校	3年
25	野土 裕彦	高松市立三溪小学校	4年
26	福家 正人	高松市立仏生山小学校	5年
27	亀井 伸治	高松市立多肥小学校	校長
28	白川 由美	高松市立多肥小学校	6年
29	靄羽 美緒	高松市立多肥小学校	5年
30	篠原 裕之	高松市立多肥小学校	特別支援
31	長井 勝洋	高松市立川島小学校	6年
32	森口 英樹	高松市立十河小学校	2年
33	池田 孝徳	高松市立植田小学校	校長
34	安倍 幸則	高松市立上西小学校	教頭
35	日下 哲也	高松市立上西小学校	校長
36	轟 秀明	高松市立大野小学校	4年
37	森川 美香	高松市立大野小学校	5年
38	山下 晃	高松市立浅野小学校	校長

39	池田 康輔	高松市立川東小学校	3年
40	亀井 健男	高松市立川東小学校	教頭
41	黒川 浩一	高松市立香南小学校	6年
42	藤井 武史	高松市立香南小学校	学・生
43	猶本 篤史	三木町立平井小学校	5年
44	宮西 亮輔	三木町立氷上小学校	3年
45	森 正彦	三木町立氷上小学校	校長
46	真鍋 長嗣	高松市立栗林小学校	3年
47	篠原 絵里香	高松市立栗林小学校	6年
48	井上 泉	高松市立高松第一小学校	専科
49	高木 恭子	高松市立太田小学校	3年
50	柏 徹哉	高松市立木太小学校	4年
51	川田 将弘	高松市立木太小学校	4年
52	増田 泰己	高松市立木太小学校	5年
53	熊野 真美	高松市立中央小学校	5年
54	平井 小百合	高松市立中央小学校	3年
55	檜原 一宏	高松市立中央小学校	5年
56	池田 茂樹	高松市立屋島小学校	内地留学
57	間島 大輔	高松市立屋島東小学校	6年

【丸亀社研】

番号	会員氏名	学校名	学年等
1	山野 正登	丸亀市立城乾小学校	教頭
2	西川 由華	丸亀市立城乾小学校	6年
3	合田 吉宏	丸亀市立城坤小学校	教頭
4	梅谷 旬	丸亀市立城坤小学校	特別支援
5	秋山 侑大	丸亀市立城坤小学校	5年
6	鎌谷 敦之	丸亀市立城北小学校	校長
7	増井 康弘	丸亀市立城北小学校	6年
8	中西 昇	丸亀市立城北小学校	特別支援
9	平田 晃司	丸亀市立城西小学校	3年
10	平田 啓介	丸亀市立城西小学校	4年
11	多田 明広	丸亀市立城西小学校	6年
12	平澤 昌司	丸亀市立城南小学校	少人数
13	白川 豊浩	丸亀市立城南小学校	教頭
14	山本 奈保子	丸亀市立城東小学校	少人数
15	高木 弘信	丸亀市立城東小学校	6年
16	長沼 裕子	丸亀市立城辰小学校	1年
17	若林 菜穂子	丸亀市立郡家小学校	3年
18	片岡 由紀子	丸亀市立郡家小学校	6年
19	和田 早苗	丸亀市立郡家小学校	4年
20	馬場 直明	丸亀市立飯野小学校	6年

21	田井 敏之	丸亀市立飯野小学校	校長
22	旅田 敏弘	丸亀市立垂水小学校	専科
23	美濃 珠美	丸亀市立垂水小学校	3年
24	寒川 英樹	丸亀市立富熊小学校	少人数
25	吉田 良三	丸亀市立飯山北小学校	6年
26	櫻井 道芳	丸亀市立飯山北小学校	5年
27	大佐古 佳美	丸亀市立飯山北小学校	特別支援
28	眞井 孝征	丸亀市立飯山南小学校	6年

【坂出・綾歌社研】

番号	会員氏名	学校名	学年等
1	山田 知志	坂出市立坂出小学校	校長
2	山本 香代子	坂出市立坂出小学校	3年
3	山本 泰司	坂出市立坂出小学校	特支
4	三谷 沙織	坂出市立坂出小学校	3年
5	花房 長広	坂出市立東部小学校	教頭
6	丸尾 ルミ子	坂出市立東部小学校	4年
7	福家 寿夫	坂出市立東部小学校	少人数
8	山西 由里子	坂出市立金山小学校	4年
9	大西 浩史	坂出市立西庄小学校	5年
10	田中 秀年	坂出市立西庄小学校	3年
11	上村 勇介	坂出市立林田小学校	5年
12	藤井 隆法	坂出市立加茂小学校	5年
13	森本 宗平	坂出市立府中小学校	教頭
14	福家 俊哉	坂出市立川津小学校	校長
15	丸尾 浩一	坂出市立川津小学校	4年
16	桂 真美	坂出市立川津小学校	4年
17	野村 亮子	坂出市立松山小学校	教頭
18	河野 富男	坂出市立瀬居小学校	3, 4年複式
19	沼田 久仁子	坂出市立櫃石小学校	5, 6年複式
20	西尾 由加	綾川町立昭和小学校	5年
21	早瀬 良子	綾川町立昭和小学校	教頭
22	福家 実樹	綾川町立昭和小学校	2年
23	土岐 味代子	綾川町立綾上小学校	5年
24	青木 弥生	綾川町立陶小学校	6年
25	檜原 佳代	綾川町立滝宮小学校	少人数
26	白井 邦彦	綾川町立羽床小学校	校長
27	松尾 美子	綾川町立羽床小学校	3年
28	大高 浩一	宇多津町立宇多津小学校	少人数
29	大野 美和	宇多津町立宇多津小学校	3年
30	勝田 健彦	宇多津町立宇多津小学校	5年
31	宮武 克明	宇多津町立宇多津北小学校	4年
32	藤田 順也	宇多津町立宇多津北小学校	3年
33	西村 和世	宇多津町立宇多津北小学校	6年
34	鳥居 久宮子	宇多津町立宇多津北小学校	4年

【小豆社研】

番号	会員氏名	学校名	学年等
1	石井 昌彦	小豆島町立苗羽小学校	校長
2	藤本 修	小豆島町立安田小学校	教頭
3	平林 泰徳	土庄町立北浦小学校	学校生活支援
4	山下 結花	土庄町立土庄小学校	3年
5	黒川 幸宣	土庄町立湊崎小学校	4年
6	笠井 誉子	土庄町立湊崎小学校	特別支援
7	淀谷 知恵	土庄町立豊島小学校	3年
8	塩見 強	小豆島町立池田小学校	特別支援
9	田村 一郎	小豆島町立星城小学校	学力支援
10	瀬名 宏樹	小豆島町立安田小学校	学力支援
11	上嶋 光晴	小豆島町立安田小学校	少人数担当
12	高木 浩彰	小豆島町立苗羽小学校	3年

【さぬき・東かがわ社研】

番号	会員氏名	学校名	学年等
1	三井 重彰	さぬき市立造田小学校	校長
2	広瀬 強	さぬき市立松尾小学校	校長
3	橋本 義人	東かがわ市立丹生小学校	教頭
4	大高 哲也	さぬき市立石田小学校	教頭
5	六車 浩	東かがわ市立引田小学校	特別支援
6	松村 和仁	東かがわ市立本町小学校	5年
7	仲内 ゆかり	東かがわ市立本町小学校	2年
8	砂川 彩	東かがわ市立本町小学校	1年
9	白澤 一修	東かがわ市立三本松小学校	3年
10	山下 勝正	東かがわ市立丹生小学校	6年
11	柴田 奈緒	東かがわ市立丹生小学校	5年
12	藤澤 太地	さぬき市立志度小学校	3年
13	近江 麻子	さぬき市立志度小学校	1年
14	久保田 直寛	さぬき市立志度小学校	2年
15	安部 静代	さぬき市立志度小学校	4年
16	木村 理紗	さぬき市立小田小学校	4年
17	増田 奈々	さぬき市立中央小学校	4年
18	村上 勝	さぬき市立鴨部小学校	3年
19	田中 由賀里	さぬき市立神前小学校	5年
20	山下 博	さぬき市立石田小学校	特別支援
21	和田 千幸	さぬき市立長尾小学校	専科
22	松原 伸二	さぬき市立造田小学校	4年

【三観社研】

番号	会員氏名	学校名	学年等
1	岡根 淳二	観音寺市立柞田小学校	校長
2	安藤 清和	三豊市立吉津小学校	校長
3	柴田 英明	観音寺市立観音寺南小学校	校長
4	臼杵 優	観音寺市立柞田小学校	教頭
5	高橋 克佳	観音寺市立常磐小学校	教頭
6	安藤 通	観音寺市立豊浜小学校	6年
7	小野 祐生	観音寺市立豊浜小学校	少人数
8	村上 輝司	観音寺市立大野原小学校	6年
9	出濱 大資	観音寺市立観音寺南小学校	5年
10	大平 晃司	観音寺市立高室小学校	4年
11	秋元 一秀	観音寺市立一ノ谷小学校	5年
12	古子 貴将	観音寺市立一ノ谷小学校	少人数
13	合田 雅気	観音寺市立一ノ谷小学校	6年
14	黒川 実	三豊市立大野小学校	5年
15	岩田 典男	三豊市立比地小学校	5, 6 社会
16	萬亀 弘吉	三豊市立下高瀬小学校	6年
17	岸上 也寸志	三豊市立詫間小学校	少人数

【仲善社研】

番号	会員氏名	学校名	学年等
1	田中 直樹	まんのう町立琴南小学校	校長
2	福家 親夫	善通寺市立東部小学校	校長
3	寺嶋 俊秀	多度津町立四箇小学校	教頭

香川県小学校社会科教育研究会会則

1 総則

第1条 本会は、香川県小学校社会科教育研究会という。

第2条 本会は、会員相互連絡協調して、香川県社会科教育の振興を図ることを目的とする。

第3条 本会は、社会科教育に関心をもち、本会の趣旨に賛同する者をもって組織する。

2 事業

第4条 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

- 1 社会科教育振興に関する研究会、発表会、講習会を開くこと
- 2 社会科教育に関する資料の収集、情報交換をすること
- 3 社会科教育に関する編集、刊行をすること
- 4 定例研究集会及び研究委員会等の開催に関すること
- 5 文部科学省並びに香川県教育委員会等の諮問に答え、意見の具申をすること
- 6 その他社会科教育に関すること

3 役員

第5条 本会に、次の役員をおく。

会長 1名 副会長 若干名 幹事 若干名 会計監査 2名
理事（各郡市代表）若干名 顧問 若干名
事務局（運営・会計・研究部代表・編集部代表）若干名

第6条 会長、副会長は、理事会の議を経て、総会において承認する。

幹事、会計監査は、会長の指名とする。

理事は、各郡市研究会から選出する。

顧問は、本会の歴代会長とする。

事務局は、会長の指名とする。

第7条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長をたすけ、会長事故のあるときは、その代理をする。

幹事は、本会の目的を達成するよう援助する。

会計監査は、会計事務を監査する。

理事は、理事会を構成し、重要事項を審議または議決し、会務の執行にあたる。

事務局は、運営事務、会計事務、研究事務、編集事務を処理する。

第8条 役員の任期は、1ヵ年とする。但し、重任することができる。

補欠役員の任期は、残任期間とする。

役員は、任期が満了しても後任者が就任するまで、その職務を行わなければならない。

4 理事会

第9条 理事会は、必要に応じて会長が招集する。

第10条 理事会は、総会に提出する議題を審議し、会務の執行に当たる。ただし、緊急を要する場合には会長、副会長で処理し、次の理事会の承認を求めるものとする。

5 総会

第11条 総会は、必要な場合会長が招集する。

第12条 総会は、必要に応じ、理事会から提出された事項について協議し、承認する。

6 定例研究集会

第13条 本会の事業を遂行するために、定例研究集会を開催する。

第14条 定例研究集会の組織及び運営については、理事会で決定する。

7 研究委員会等

第15条 本会の事業を遂行するために、研究委員会及び社会科の基礎・テスト編集委員会を開催する。

第16条 研究委員会及び社会科の基礎・テスト編集委員会の組織及び運営については理事会で審議し、委員会は会長が招集する。

8 会計

第17条 本会の経費は、会員の会費、寄付金並びに事業による収入金による。

第18条 本会の会計年度は、4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

第19条 本会の予算の議決および決算の承認は、総会で行う。

附則

1 本会の規約の改廃は、理事会で決める。

2 本会の施行に必要な細則は、別に定める。

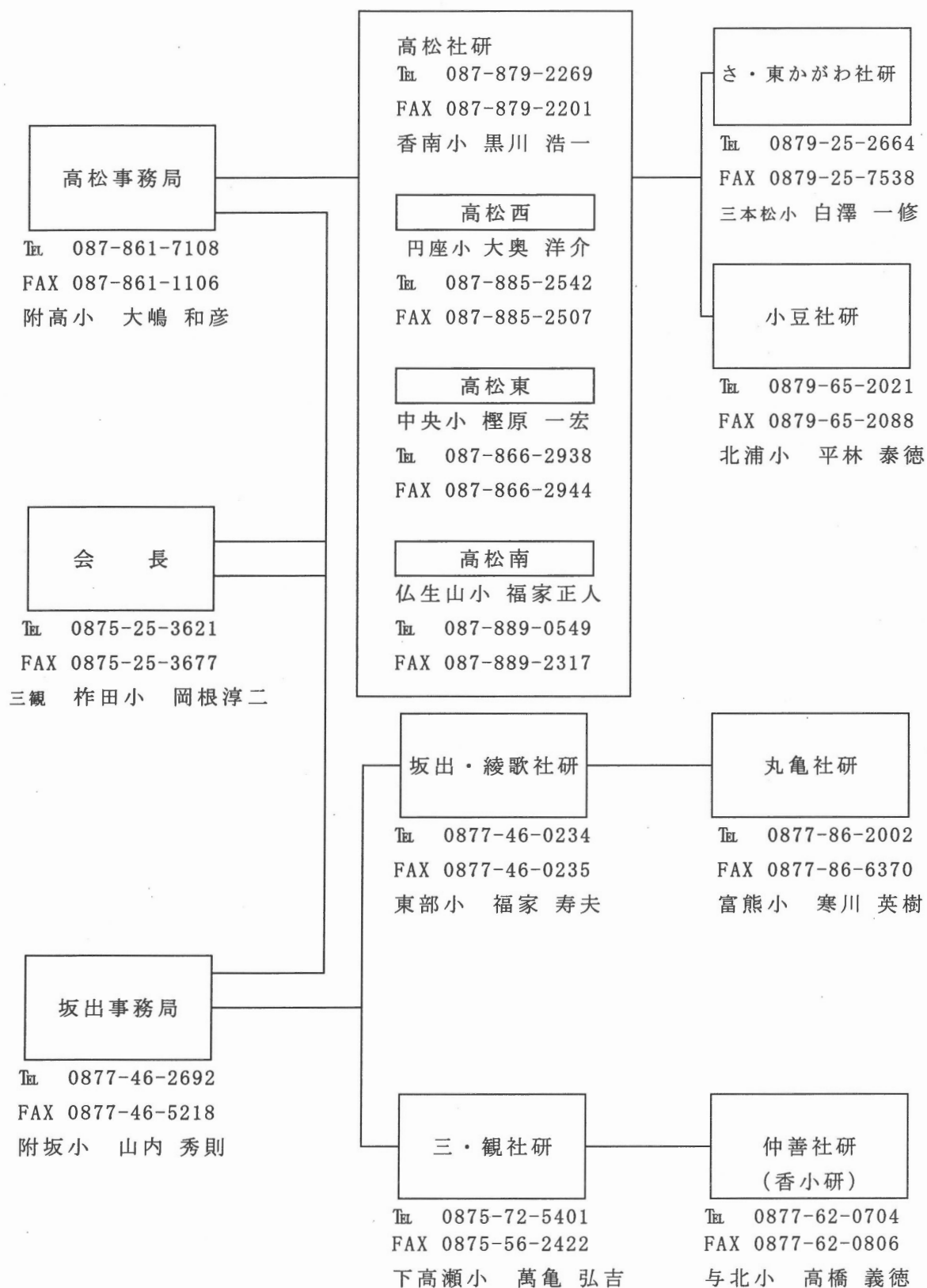
3 本規約は、昭和24年4月1日より施行する。

4 平成13年1月8日改正、平成13年4月1日より施行する。

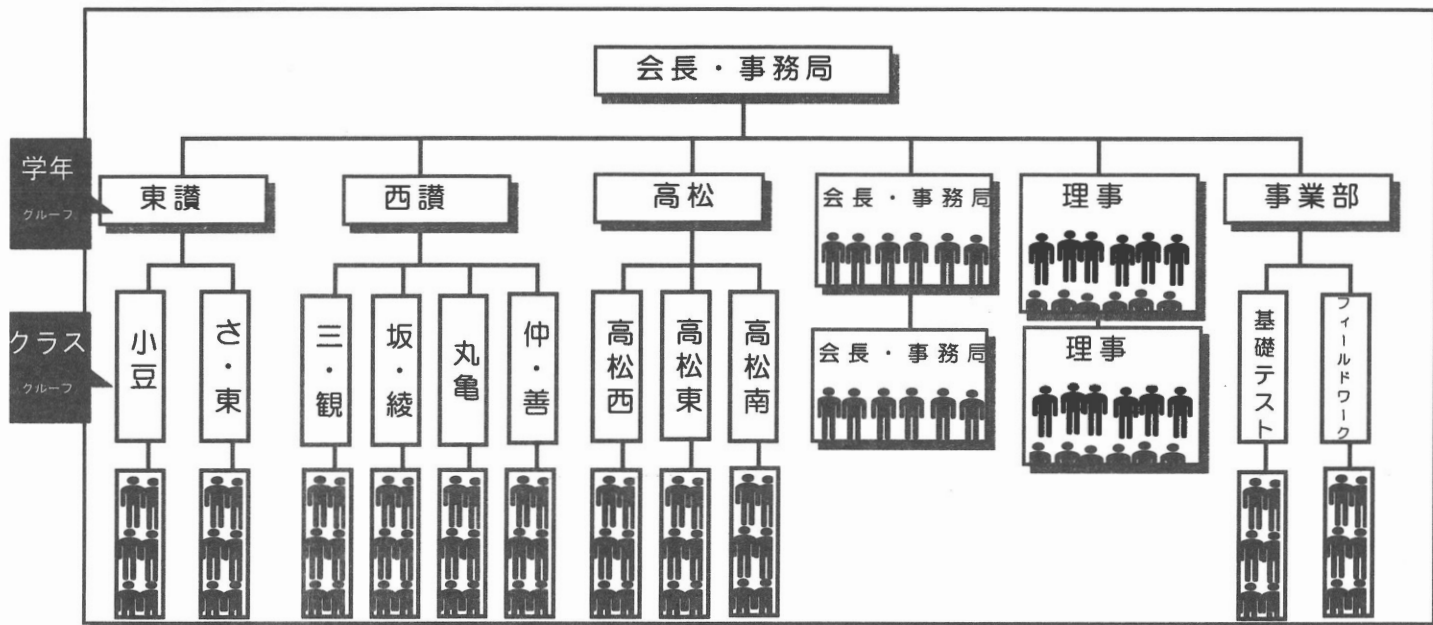
5 平成21年4月29日改正、同日より施行する。

6 平成22年4月29日改正、同日より施行する。

平成23年度 香社研(香小研社会科部会)連絡網



■ 香社研携帯メール 組織図



■ 携帯メール 登録方法

1 メールを送る

下記のメールアドレスに申請メール（宛先のみ。本文は不要です）を送ってください。

○申請メールの宛先 → ad@ptamt.com

○QRコード利用時は



Docomo



AU SoftBank

2 ご案内メールが返ってくるのを待つ

登録画面のアドレスが記入された「学校連絡網登録のご案内」メールが返ってこない場合は、裏面をご覧ください。

3 ご案内メールにあるアドレスをクリック

http://i.ptamt.com/***** 右図

[件名] 学校連絡網登録のご案内

学校連絡網への登録を行ってください。
http://i.ptamt.com/*****

4 学校コードを入力する

- ① 学校コードをクリック
- ② **6195645** を入力する。
- ③ 決定ボタンを押す

5 学年(グループ)を選択する

① 6つの学年（グループ）の中から、ご自身の所属グループを選択する。

☐ 東讃 ☐ 西讃 ☐ 高松 ☐ 会長・事務局 ☐ 理事 ☐ 事業部

② 決定ボタンを押す。

6 クラスを選択し、氏名を入力する

① クラスを選択する。

☐ 小豆 ☐ さ・東 ☐ 三・観 ☐ 坂・綾 ☐ 丸亀 ☐ 仲・善
☐ 高松西 ☐ 高松東 ☐ 高松南 ☐ 基礎テスト ☐ フィールドワーク

② 出席番号は、入れない。

③ 名前を入力する。

④ 決定ボタンを押す。

7 クラス等2つ以上に所属する場合は、追加登録する。

1～6を繰り返し、5や6で追加するクラスを追加登録する。

